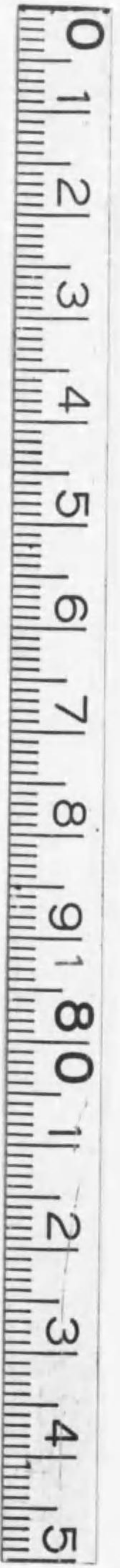


書叢藝文界世
メロサ

321
276



始



特264
995

書叢藝文界世

メロサ

著ドワイワ



社藝支

世界文藝叢書刊行の趣旨
發行所寄贈本

極めて廣き範圍の讀書人を満足せしむべき圖書を提供するに
は種々困難なる條件に遭遇する。その主なるものを擧ぐれば、
一、極めて廉價に提供し得る圖書。二、文藝趣味を有する人、
また然らざる人にも歡迎さるゝ圖書。三、外國語の素養ある人
また之なき人にも讀まるゝ圖書。四、學生諸君又は一家、社會
國家の務めに多忙なる人に對し、極めて僅かなる時間に於て趣
味と實益を供給し得らるゝ圖書。五、永久に歡迎さるゝ圖書等
如上五項目は是非備へねばならぬ。本叢書刊行の趣旨はこの五
項目を基礎として、何人も知らねばならぬ世界の文藝上の名作

を、廣く紹介せんとするにある。

浩潮なる作品を一小冊子に纏めんとするには、勢ひ原作の内容を壓搾せねばならぬ。名作を壓搾して其の精髓を表はし、十分に原作の妙味を傳へんことは極めて至難の事である。而も此至難を愉快に成し遂げ、理想に近からしめたのが本叢書である。本叢書が讀者の要求の幾分なりとも充たすことを得たならば、それは私の幸甚とするところである。

小 林 篤 里

序

オスカア・ワイルドは一八五六年愛蘭のダブリンに生れ、一九〇〇年を以て、巴里の魔窟の宿屋の一室に、みじめな最後をとけた劇作家にて、サロメは彼が戯曲中の傑作であります。

此劇は一八九三年佛蘭西語にて書かれたものにて、其題材が聖書にとつたものである處から、時のチエンバレン内閣は之が上場を禁じたのであります。翌年サラ・ベルナル夫人によりて巴里に於て演ぜられたのであります。

一般に此劇は最初から、サラ・ベルナル夫人の爲に書かれたもの、やうに傳へられてゐますが、それは全然誤りにて、決して最初からベルナル夫人の爲に書かれたものでないことは、ワイルド自らが、嘗てタイムス紙上に公にした言によりても明かであります。

猶ほ序に云つて置きたいことは、此劇は私が嘗て脚本叢書として譯した「サロメ」の全文に、更に説明的の文句を加へたものであつて、此劇の解説や、ワイルドの詳傳に至りては、同叢書中の拙譯「サロメ」を参照されんことを望むのであります。

最後に便宜の爲に、左に登場人物をあけて置きます。

人物

- ヘロド・アンチバス——猶太王
- ヨカナアン——預言者
- 若きシリア人——近衛の大尉
- チゲリヌス——若き羅馬人
- カツバドシア人

- ヌビア人
- 第一の兵士
- 第二の兵士
- ヘロヂアスの扈從
- 猶太人、ナザレ人など數人
- 奴隸
- ナアマン——首斬役
- ヘロヂアス——猶太王の妃
- サロメ——ヘロヂアスの娘
- サロメの奴婢數人

譯者

サ
ロ
メ (Salomé)

オスカア・ワイルド作

残忍暴戻なヘロド・アンチパスは、自分の兄である猶太の國王を殺して、自ら代つて猶太王となり、嫂である王妃ヘロヂアスの手を取つて更に自分の妃とした。

先王とヘロヂアスとの間に、世にも珍らしい美しい王女が一人ある。其名をサロメと云つて、妖艶花の如き姿は、見る人を悉く惱殺しないでは置かないのである。

兄王を殺して其妻の手を握つたヘロツドは、サロメの姿を見るなり忽にし

て其捕虜となつてしまつた。けれどもヘロッドは兄を殺して平氣で其妻を奪ふことの出来るやうな人でありながら、更に其義理ある子に對しての戀を遂げんとするには、さすがに逡巡たるものがあつた。必ずしもヘロヂアス妃の嫉妬が恐ろしいばかりではない。彼をして本能の満足を得しむるには其處に色々心の惱みもあつた。ヘロッドは已むを得ずして、妃の眼をぬすんでは、徐ろに甘言を以てサロメの心を誘惑するより外はなかつた。自ら望むと一として成らざるなき一天萬乘の君王でありながら、ヘロッドにとつて思ひに任せぬは只此戀のみであつた。ヘロッドは徒らに焔ともゆる情熱にやるせなき胸を焦しながら、朝に夕にサロメの歡心を買ふに汲みたるのであつた。

やかて干戈治つて暫くすると、シイザア(羅馬皇帝)は使節を遣はして猶太王の宮殿に所謂天機を伺はしめた。云ふまでもなく當時に於けるシイザアの勢力は驚くべきものにて、其一言一行は他の列國君主をして意の如くならしむ

るに足るものである。ヘロッド王は禮を厚くして使者を迎へ、宮殿の大門口に於て盛大なる饗應の宴を張つた。所謂凄じいサロメの大悲劇が生み出されたのは此夜のことである。

幕があくと、舞臺は饗應の間に接した宮殿内の大きな廣場にて、數人の兵士は欄干にもたれかゝり、若きシリア人は饗宴の間の入口に立つて、サロメ王女の美しい姿に見とれてゐる。右側には大きな階段があり、左側の方に青銅の側をつけた古い水溜が、

青白い月は靜かに物凄光をなけてゐるのである。
若きシリア人は先づ口を開いて云つた。

「サロメ王女は今夜は、まあ何て美しいのであらう。」若きシリア人は其名をナラボスと云つて、少しばかり前までは一國の王子であつたが、父王がヘロ

ツド王に放逐されてしまふと、母と共にヘロッド王の宮殿に連れられ、母はヘロヂアスの腰元として、自分は近衛の大尉に任せられヘロッド宮殿の守衛をつとめてゐるのである。この若きシリア人も亦一たびサロメの姿を見るなり、直にやるせない戀に陥つてしまつたのである。けれどもサロメは哀むべき彼に對しては殆んど何の顧る所もなかつたので、若きシリア人は遂に悶々の情如何ともするに由なく、觸らは直ちにはり裂けんとする迄に至つたのである。

狂ふが如き思を以て吐いた若きシリア人の言葉に對して無頓着なるヘロヂアスの扈従はいふ。

「あの月を見たまへー 何てマア變に見えるんだらうー 墓穴の中から出て來る女のやうだ。死んだ女のやうだ。死んだものをさがしてゐるやうだとは君思はないかね。」

月の光がどうであらうと、それが若きシリア人にとつては何であらう。若きシリア人の思は只徒らに燃ゆるのみである。

「王女は變な顔つきをして居らつしやる。黄色なエエルを被つて、銀の足をした小さい王女のやうだ。小さい白鳩の足をしてる王女のやうだ。王女が踊つてらつしやるやうには君思はないかね。」

ヘロヂアスの扈従も亦彼の言に對しては吾れ關せずである。

「月は死んだ女のやうだ。大變ゆつくりと動いてゐる。」

丁度此時響應の間で騒ぐ音がきこえた

と直ちに第一の兵士は口を開いて、

「何て騒動だい！ あの吠えてる野獸どもは、一體なんだい？」

といふと第二の兵士は、

「猶太人だ。奴等いつもあの通りだ。宗教の喧嘩をやつてゐるんだよ。」と答へ

るのである。

「どうして、宗教の喧嘩をやるんだろね？」

「分るもんか。いつもやつてるんだ。例へて見りや、ファリジイ派の奴等が天使といふものがあるといふと、サヂユシイ派の奴等は天使なんてありやしないつていふんだ。」

「そんなことで喧嘩なんぞするなあ、馬鹿くしいと思ふなあ。」

情火に焼けんとしつゝある若きシリア人は又してもいふのである。

「サロメ王女は、今夜は、マア、何て奇麗なのだらう！」

ヘロヂアスの扈從は遂にたまらなくなつていふのである。

「君は、しよつちう王女ばかり見て居るんだね。あんまり見過ぎてるよ。そんな風に見つめて居るのは危ないよ。何か恐ろしいことが起つて來るかも知れないよ。」

若きシリア人は王女の美しさに酔つてゐるのである。「王女は今夜に全く奇麗だ。」

此時第一の兵士は饗宴の間をのぞき見ていふ。

「王様は陰氣な顔をしてゐらつしやるなあ。」

第二の兵士も又、

「さうだ、陰氣な顔をしてゐらつしやるなあ。」

「何だか見つめてゐらつしやるよ。」

第一の兵士がかういふと第二の兵士は之に賛して、

「誰か見つめてゐらつしやるんだ。」

「誰を見てゐらつしやるんだらう？」

「分らないさ。」

二人がかうした話をしてゐると若きシリア人はまた例の王女の姿をながめ

つゝいふのである。

「王女はマア、何て青白いんだろ！ あんな青白い顔をしてらつしやるのを見たことがない。銀の鏡にうつつた白薔薇の影のやうだ。」

ヘロヂアスの扈從はまたしても、たしなめるやうにいふ。

「君は王女をみつめていけないね。あんまり、みつめ過ぎてるやうだよ。」
此時第一の兵士は突然高く叫んだ。

「お妃が王様のコップにおつぎなされた。」

と羅馬からの使節につれられて来たカツバドシア人は、

「あれが、お妃のヘロヂアス様かい、あの眞珠で飾つて黒い冠を被つて、髪の毛に青い粉をつけてお出でなさるのが。」

第一の兵士は答へて、「さうさ。あれがお妃のヘロヂアス様だよ。」
之をきいてゐる第二の兵士はやがて問はず語りを始めるのである。

「王様は葡萄酒が大變好きだ。三通の葡萄酒を召上るんだよ。サモスレスの島からもつて来るのは、羅馬皇帝の上衣のやうな紫色なのだ。」

シイザアの語を耳にしたカツバドシア人は「おれは羅馬皇帝を見たことがない。」

第二の兵士はつゞけていふ。「それからサイプラスの町から来るのは、金のやうな黄色なのだ。」

金の語をきいたカツバドシア人は「おれは金が好きだ。」

第二の兵士はなほもつゞけて喋つてゐる。

「それから三番目のは、シ、リイから来る葡萄酒だ。それや血のやうに赤いんだ。」

血の語を耳にしたヌビア人は話を取つてお國物語を始ある。ヌビア人もまた使節につれられて来た戦士である。

『おれの國の神様達は、血が大好きだ。年に二度づつ、若い男と女を人身御供にあけるんだ。男の子を五十人と、女の子を百人となあ。それでゐて、とつてもまだ御供物が足りなささうなんだ、なぜだつて神様達がおれどもにえらうきつくなさるんだものなあ。』

カツバドシア人も亦神様の話を始める。

『おれの國にや、神様なんて一人も居やしない。羅馬人がみんな追拂つちまいやがった。神様は山ん中へ隠れてるといふものがあるが、おれは本當にしないんだ。三晩といふものおれは山ん中に居て、どこもかも神様をさがしてゐるが。めつかりやしなかつた。それから、たうとおれは神様達の名を呼んで見たんだ。それでも神様は出て來やしなかつた。おれは神様達は死んだろと思ふよ。』

第一の兵士「猶人は、お前なんぞに見えない神様を拜んでるんだつて。」

『おれにやそんなことはわからない。』

カツバドシア人がかういふと第一の兵士は更に念を押して、

『本當に眼に見えないものを信仰してるのは猶人ばかりだよ。』

『そんなことは、おれなんだから見ると、全く馬鹿くしいやうだがなあ。』折しも例の古い水溜の中からヨカナアンの物凄い聲がきこえ出した。ヨカナアンは此國の預言者にして常に國王及王妃の罪を鳴らして恐ろしい言を吐いてゐた。ヘロツド王は遂に堪らなくなつてヨカナアンを水溜に幽閉したのである。

『おれの後から、おれよりかすつと強いものがやつて來やう。おれはその人の靴の紐を結べるほどの價值もないものだ。その人が來ると、淋しい所が喜ばしうならう。其場所が百合のやうに咲き盛るだらう、盲人の眼にも見えやう。聾の耳も聽えるやうにならう。生れたばかりの赤ん坊が、龍の寢床に手

を置けよう、獅子の鬣を引いてあるけるだらう。」

「彼奴をだまらして呉れよ。いつもく馬鹿けたことを言つて居やがる。」

第二の兵士がかういふと第一の兵士は之を遮つていふ。

「いや、く。あれは聖者だ。そして大變に穩かな人だよ。毎日おれが食べるものを進ぜると、おれにお禮をいふのだよ。」

「不思議に思つたカツバドシア人は「誰だい、あれは？」

第一の兵士は答へて、「預言者だ。」

「名前は何といふのだい？」

「ヨカナアン。」

「何處からやつて來たんだい？」

「沙漠から來たんだ、其處で蝗と野蜂の密を食つてたんだ。駱駝の毛を着て腰にはなめし革の帶をしめて居た。顔を見るとぞつとするやうだつたよ。い

つもく大變な人が、後をついて歩いてた。弟子まで居たんだつて。」

カツバドシア人はなほも「あの男、何をいつてるんだい？」

「分らないさ。時には恐ろしいことを云つてるが、何を云つてるんだか、とても分りつこなしさ。」

「カツバドシア人は遂に、「あの男に會つてもいゝかしら。」

「いゝや、王様がそれをお禁めになつてゐるんだ。」

暫くだまつてゐた若きシリア人はまた轉り出したのである。

「王女は扇で顔をお隠しなすつた。小さい白いお手が鳥家へ飛んで行く鳩のやうに、ヒラリヒラリしてゐる。白い蝶々のやうだ。まるで白い蝶々のやうだ。」

ヘロヂアスの扈從は遂にとがめた。

「それが君にどうしたといふのだい？ なぜ君はあの方を見つめたのだい？ あの方を見つめちやいけない。何か恐ろしいことが起つて來るかも知れな

いよ。」

此時カツバドシア人は水溜を指して、「マア、變な牢屋だなあ！」と第二の兵士は、「古い水溜だ。」

「古い水溜だつて？ さぞ體にわるいだらうなあ。」

「いやなあに？ 例へば王様の御兄弟、あのお兄い様な、ヘロヂアス女王の初めの御亭主、あの方は、十二年もあの中に入れられてお出でなすつた。それでも死にはなさらなかつた。とうと十二年の後に、絞め殺されておしまひなさらなきやならなかつた。」

物凄じい話をきかされたカツバドシア人はいふ、

「絞め殺された？ 誰が思ひ切つてそんなことをしたのだい。」

第二の兵士は、首斬役の大きな黒奴を指して、「あすこの、あの男だ、ナアマんだ。」

「あの男、恐がつて居やしなかつたんだね？」

「いや、なあに！ 王様があれに指輪をおやりになつたんだ。」

カツバドシア人は怪みながら「何の指輪を。」

と第二の兵士は、「死の指輪さ。だから恐かなかつたんだよ。」

カツバドシア人は首をかたけていふ。

「でも、王様を絞め殺すなんてことは恐ろしことだぜ。」

第一の兵士は此時横合から口を出していふ、

「どうして？ 王様だつて、他の人間と同じやうに、首は一つきやありやしないよ。」

「おれは恐いと思ふなあ。」カツバドシア人はさも恐ろしさうにいふのである。

若きシリア人はまた叫び出した。

「王女がお立ちなすつた！ 食卓をお逃げなさるところだ！ 大變に心配事があるやうだ。マア、此方の方へ入らつしやるんだ。さうだ、おれ達の方へいらつしやるんだ。何て眞青だろ！ あんな眞青なお顔を見たことがない。」とヘロヂアスの扈從は歎願するやう、「あの方を見つめないでたまへよ。後生だから、あの方を見つめないで来てくれたまへ。」

王女を見つめてゐる若きシリア人は嬉しくてたまらないのである。

「王女は路に迷つた鳩のやうだ。……風にゆれてる水仙のやうだ。……銀色の花のやうだ。」

ヘロツド王の凝視をのがれんとして、饗宴の間をぬけだしたサロメは、靜に其歩みを廣場の方に運びながらいふ。

「あたしあんなとこに居たくないわ。ゐられないんだわ。どうして王様は、あのふるくとふるえてる臉の下の、鼯鼠やうな眼で、しよつちうあたしを

見つめて居らつしやるのだらう。お母様の御亭主があんなにあたしを見つめてゐらつしやるのは變だわ。何のことだかわたしは分らないわ。本當はさうだ、あたしにはわかつてゐるわ。」

面のあたりに王女を見るとの出来る若きシリア人は嬉しげに挨拶する。

「あなたは、今しがた、宴會の席をお立ちになりましたのですね？ 殿下。」

王女サロメは猶つゞけていふ。

「なんてマア、此處の空氣はいゝ氣持だらう！ あたし此處なら息が出来るわ！ あすこの中では、ジェルサレムから来た猶人たちは、馬鹿くしい儀式のことでお互に噛みつき合つてるし、野蠻人はやたら飲んでく、床の上にお酒をこぼしてゐるし、スミルナから来た希臘人は、眼や頬に彩色をして縮れた髪の毛は渦卷に巻きあけてゐるし、黙つてる狡猾い埃及人は、疲れた馬のやうな長い爪をして、赤茶けた外套を着て居るし、野蠻な粗糲な羅馬人は

卑陋ひろうなおしやべりをしてるんだもの、あゝ、なんていやな羅馬人ローマじんだらう！
亂暴らんぼうで下卑ひびてるて、その癖じびん自分では貴族きしやくのやうな風ふうをしてるんだもの。」

若わかきシリア人はほかんとしてゐることは出来ないのである。

『あなたお掛けなさいませんか？ 殿下てんか。』

とヘロヂアスの扈從こしやうは心配しんぱいけな顔かほをしていふ。

『なぜ君きみはあの方に話はなしなぞするんだね？ なぜ君はあの方かたを見つめるんだね？ マア！ 何か恐おそろしい事ことでも起おこるんだらうな。』

若わかきシリア人の眞心まごころをこめた言葉ことばも、サロメにとつては風かぜのそよぎにも劣おとつたものである。

『月つきを見てるのは、何なんていゝ氣持きもちだらう！ 月つきは小さいお金のやうだわ、小さい銀ぎんの花はなのやうだとは思おもはないの。月は冷つめたくつて純潔じゆんけつだわ。屹きつと度ど處女ぢよせうだわ。處女ぢよせうの美うつくしさをもつてるんだわ。さうだ處女ぢよせうだわ。まだ自分で自分じぶんの身み

をけがしたことなんかないんだわ。ほかの女神達めがみたちと同じやうに、男おとこに自分の體からだなんぞまかせたことはないんだわ。』

王女わうじよが月つきをながめながら、わが身の純潔じゆんけつに誇ほこりを感じてゐる折ひざしもヨカナアンの聲こゑは又またきこえ出すのである。

『主しゆがおいでなされた。人の子ひとこがおいでなされた。セントオロスセントオロス（馬身人首ばしんじんしゆの怪物くわいぶつ）は、河かの中なかへ隠かくれてしまつた。サイレンは河かからにけだして、森もりの落葉おちばの下したに寢ねて居ゐる。』

『大きな聲こゑをしたのは、誰たれだつたの？』

サロメがかうきくと第二だいにの兵士へいしは、『豫言者よげんしゃで御座ござります、殿下てんか。』

とサロメは、『あゝ、豫言者よげんしゃ！ あの方かたの王様わうさまの恐おそがつてらつしやる、あの人ひと？』
『私わたし共どもはそんなことは何なんにも存ぞんじません、殿下てんか。大きな聲こゑをしたのは、豫言者よげんしゃのヨカナアンで御座ござりました。』

返事に窮した第二の兵士はいふのであつた。
若きシリア人は猶サロメの機嫌を伺はんことに汲々としてゐるのである。
「お興をもつて参らせませうですか、殿下。今夜は庭の中はいゝ景色で御座いますよ。」

けれどもサロメはどこまでも若きシリア人に對して石の如くである。

「あの人は、お母様のことについて、恐ろしいことをいつてゐたでしょ、じやないの？」

と第二の兵士は、「何をいつてゐるんだか一寸も分りません、殿下。」

やがてサロメは、「さうだ、お母様のことについて、恐ろしいことを云つてゐるのだよ。」

此時へロッド王の使命を携へた奴隷はサロメに近づいていふ。

「殿下、國王陛下が、どうぞ、お席へお戻りになるやうにとのこととで御座り

ます。」

サロメには嚴乎として「あたしは歸らないよ。」

若きシリア人はサロメの身を氣遣ひながらいふのである。

「御免下さいまし、殿下、でも若しお歸りになりませんと、何かよくないことが起るかも知れませんが、御座いますよ。」

けれどもサロメは彼の言には耳さへ寄せないのである。

「あの豫言者は年寄かえ？」

戀に捕はれたものゝ心ほど哀れむべきものはない。若きシリア人は一生懸命になつて云ふのである。

「殿下、おもどりになつた方が宜しう御座いませう。御免を蒙つて御案内致しますせう。」

石の如きサロメは遂に親切なる若きシリア人の顔を見もしなかつた。

「此豫言者は……あの人は年寄かえ？」

「いゝえ、殿下、あれは全く若い男で御座ります。第一の兵士が答へる。

「確にさうとはいへないよ。あれは、エリアスだといふものもあるよ。」

第二の兵士はかう云つて遮るのである。
 豫言者に興味をもつたサロメは彼について色々と尋ね出した、

「エリアスつて誰なの？」

第一の兵士はいふ。「此國のごく昔の豫言者で御座ります、殿下。」
 徒らに歸ることも出来ない奴隷は當惑していふ。

「國王陛下には、何と御返事を申上げますで御座りませうか？」
 豫言者ヨカナアンの聲は又きこえる。

「パレスチンの國よ、お前を打つた筈が折れたからといつて、お前喜ぶまいぞよ。なぜだつて、蛇の種から毒蛇が出て來ようぞよ、そして、それから生

れた奴は鳥を食はうぞよ。」

王女サロメは愈ヨカナアンに對して好奇心を催し出した。

「何といふ妙な聲だらう！ あたしはあの人と話しがして見たいわ。」

と第一の兵士は遮つていふ。「それは駄目で御座りませう、殿下。國王陛下は誰でもあの男と話をすることが御嫌ひで御座ります。頭の坊様が、あの男と話をするのをさへお禁止になりました。」

王女サロメは意志の人である、彼女は一旦口にしたら一歩もあとへ引かないのである。

「あたしはどうしても、あの人と話しがして見たいわ。」

第一の兵士は困つた、「駄目で御座ります、殿下。」
 兵士の言も國王の命令もサロメにとつては何であらう。

彼女は斷乎として云ふ、「あたし、どうあつてもあの人と話をするよ。」

若きシリア人はまた王女の身の上を心配し、願はくば彼女の一身に恙なかれかしと祈るのである。

「宴会場へ、お戻りになつた方が、およろしうは御座いませんでせうか？」
 サロメは遂に命じた。「あの豫言者をつれて来てお呉れ。」

「奴隷は此時せんかたなく退場して行くのである。」

國王の命に恐をなして居る第一の兵士は、「私共には出来ません、殿下。」
 自ら思をとけずんば已まざらんとするサロメは、此時水溜に近づいて中へのぞき込んで曰ふのである。

「マア、何て暗いのだらう、下は！　こんな暗い穴の中に居るといふのは、
 嘸恐ろしいことにちがひがないわ！　墓穴のやうだわ。」彼女はかう云つて更に兵士に、「お前達きこえなかつたのかえ？　豫言者をつれて来てお呉れつたら。あたしあの人に遇ひたいのだよ。」

第二の兵士も、「殿下、どうぞそれは御免を蒙りたく御座ります。」

王女サロメは聊か色をなしていふ。

「お前達は、どうしてさうあたしを待たせとくんだね！」

第一の兵士は王女に向つて哀願するのである。

「殿下、私共の命はあなたのもので御座ります。けれども、私共は、只今の仰せだけは致すことが出来ません。どうか、私共にはこれを仰つしやつて下さいませぬ。」

此時サロメは始めて若きシリア人を見て驚いたやうに、「まあ。」

此有様を見たヘロヂアスの扈從は獨言のやうに、「マア！　どうなつて来ることだらう？　屹度何か不仕合なことが起つて来るだらう。」

己に對して戀を包めるとを知らるサロメはやがて若きシリア人のところへ歩いて行つて、其弱點につけこんで親しげに云ふのであつた。

「お前は、あたしにこれをして呉れるの、して呉れないの？ ナラボスや。お前はあたしにこれをして呉れるのでしょ。あたしはいつもお前に親切だったのね。お前はあたしにこれをして呉れるでしょ。あたしは此の妙な豫言者をたゞ見たいのだよ。人はあの人のことを、いろ／＼と話して居たよ。王様もあの人のことを、よくお話しなすつてらしたよ。あたし王様はあの人を恐がつて居らつしやると思ふのよ。お前、お前もあの人を恐がつてるの？ ナラボスや。」

言語をかけられた若きシリア人は嬉しげに答へるのである。

「私は、あの男を恐がりは致しません、殿下。私は怖いものは御座いません。でも國王陛下は、誰でもあの水溜の蓋をあけてはならないと、厳しくお止めになりました。」

サロメはくりかへしていふのである。

「お前はあたしにこれをしてお呉れだろ、ナラボスや。さうすりや、あしたあたしが輿に乗つて、偶像賣の門の下を通る時に、お前に小さい花を落してあげるよ、小さい緑の花をね。」

我が戀人の願も暴戻なる國王の命を思ふ時には如何ともする事が出来ないのである。若きシリア人は悲痛なる思をしながらいふ。

「殿下、わたくしには出来ません。わたくしには出来ません。」

サメロはなほも微笑みながらいふのである。「お前はあたしにこれをしてお呉れだろ。ナラボスや。ねえ、お前はあたしにこれをしてお呉れだろ。さうすりや、あした、あたしが偶像賣のる橋の側を通る時に、ヴェルの中からお前を見てあげるよ、ねえ、ナラボスや、大方あたし笑つて見せてあげるかも知れないよ。あたしを御覽よ、ナラボスや、あたしを御覽よ。マア、お前はあたしの頼むことをしてお呉れだろ、ねえ。ねえ、よく分つてるだろ……」

お前まへこれをしてお呉くれだことを、あたしちやんと知しつてゐるわ。』
若わかきシリア人はもう堪たまらなくなつた。戀こひを外そとにしては其處そこに人生じんせい眞まことに何物なにももないのである。彼は即すなはち第三だいさんの兵士へいしに合圖あひづをして、『豫言者よげんしゃをつれて來こい。……サロメ殿下でんかがお遇あひになりたいのだ。』

サロメは此命このいのちをきいて先まづ喜よろこびながらいふ、『おゝー！』
月つきを眺ながめてゐたヘロヂアスの扈從こしやうは此時このとき叫こゝろび出したのである。

『マァー！ 月つきがなんて變へんに見えるのだらう。白無垢しろむくで自分の體からだをかくさうと
してゐる、死しんだ女の手のやうには思おもへないかねえ。』

若わかきシリア人も亦また仰あやいで之これに答こたへるのである。『變かつた恰好かつかうをしてゐるなあ！
琥珀こはくの眼めをした小さい王女わうぢよのやうだ。モスリンの雲なの中なかから、小さい王女わうぢよの
やうにニコ／＼と笑わらつてゐる。』

やがて豫言者よげんしゃは水溜みづたまりの中なかから出て來きると、サロメは彼かれを見て靜しづかにあとし

ざりするのである。

ヨカナアンは例れいの怪あやしけな聲こゑをしほつて叫こゝろぶのである。『溢あふれかゝつて居ゐる
穢けがれれの杯はをもつた男おとこは何處どこに居ゐるのだ？ 銀ぎんの衣ころもを着きて、いつか大勢おほせの眼めの前まへ
で、死しな、ければならぬ男おとこは何處どこに居ゐるのだ？ 沙漠さつぱくの中なかや宮殿きうてんの中なかで、叫こゝろ
んだ人の聲こゑが聞きえるやうに、その男おとこを此處ここへ出て來きさせい。』

豫言者よげんしゃの言葉ことばの意味いみを充分じゅうぶんに解かいするとの出來できないサロメは、
『あの人は誰たれのことを云いつてゐるのかえ？』

若わかきシリア人は、『とても分わかりませんで御座ございます、殿下でんか。』

ヨカナアンは更さらにつゞけていふ。『壁かべの上に畫かいた男共おとこどもの肖像せうざうを見て、繪ゑの
具ぐで飾かつたカルデア人の肖像せうざうを見て、自じ分の眼めの慾よくの中うちにその身みをすてゝし
まつて、カルデアの國くにへ使節つかひをやつた女おんなは何處どこに居ゐるのだ。』
聊いさか預言者よげんしゃの言げんに心こゝろあたる所ところを認まめたサロメは、

「あの人の云つてるのは、お母様のことだわ。」

若きシリア人はいふ。「マア、さうでは御座りません、殿下。」

若きシリア人の慰めの言葉もサロメにとつては却つて嘲りの種である。

「さうだよ、あの人の云つてるのは、お母様のことだよ。」

ヨカナアンは改めて、ヘロヂアスの身を呪ふのである。

「腰には飾帯をつけて、頭には色んな彩の冠をかぶつた、アツシリアの隊長

どもに、身をまかせた女は何處に居るのだ？ 立派な麻や紫の着物をきて、

金の楯をもち、銀の兜をかぶつて、巨大い體の埃及の若い男どもに、身をま

かせた女はどこにゐるのだ？ その女に、主のために道をひらく人の言葉が

きこえるやうに、自分の罪を悔いることが出来るやうに、穢辱の寢床、血族

相犯の寢床から、その女を起してやれ。もしその女が罪を悔いないで、しつ

かりと其穢にくつゝいて居るなら、その女を此處へ來させい、主の扇は今そ

の手の中にあるから。」

サロメは恐をなしていふ。「でも、恐い人だ、恐い人だ！」

「此處に居らつしやいますな、殿下、どうぞ。」

かう云つて若きシリア人は王女をいたはるのである。

けれどもサロメはその言には従はうとはしないで、

「何よりも恐いのはあの人の眼だわ。チリアの花莛に、炬火であけた黒い穴

のやうだわ。龍の住つてる眞黒な洞穴のやうだわ。毒蛇の子を生む龍が住ん

でるあの埃及の眞黒な洞穴のやうだわ。幻の月の光になやまされた、黒い湖

のやうだわ。……あの人はまだ何かいふんだらうかねえ？」

戀人を思ふ心の切なる若きシリア人はどうにかして王女を此處から立去ら

しめようとするのである。「此處にゐらつしやいますな、殿下。どうぞ此處に

ゐらつしやいますな。」

サロメは猶依然として語りつゞけてゐる。

「マア、あの人のやつれてること！ あの人はやせた象牙の像のやうだわ。銀の肖像のやうだわ。屹度あの人はあのお月様のやうに潔白な人だわ。月の光のやうだわ、銀の箭のやうだわ。あの人の體は、象牙のやうに冷たいにちがひないわ。あたしもつと傍へ寄つて見たいわ。」

「いけません、いけません、殿下。」

若きシリア人がかう云つてとめるとサロメは却つて云ふのである。

「あたし、もつと傍へよつて、あの人を見なくつちやならない。」

若きシリア人もかうなつては、もはや如何ともするすべはない。「殿下、殿下。」

Salome

ヨカナアンは此時サロメを見ていふ。

「おれを見つめて居る此女は誰だ？ おれはあの女に見て貰いたくない。あ

Salome

のびかくと光つてる臉の下の金色の眼で、何のためにあの女はおれを見つめてゐるのだらう？ あの女は誰れだか、おれには分らない。また誰れだか知りたくもない。あの女を逃がしてくれ。おれが話のしたいのはあの女ではない。」

サロメは自ら名をつて云ふ。「あたしはサロメだよ。ヘロディアスの娘、ユデアの王女だよ。」

「下れ！ バビロンの娘！ 主から選ばれたものに近よるな。そちの母親は自分の穢れの酒を地上に溢らせた。あの女の罪の叫びば、神様の耳にもとどいたぞよ。」

ヨカナアンは凄じい聲で怒鳴りつけた。

けれどもサロメは却つてその聲に引よせられたやうな氣がしたのである。

「も一度話してお呉れ、ヨカナアンや。お前の聲はあたしには酒のやうなん

だもの。」

若きシリア人は愈當惑してしまつて、「殿下！ 殿下！ 殿下！」と云つて王女を止めようとするのであつた。

けれどもサロメは愈ヨカナアンに近づいて云ふのである。「も一度いつてお呉れ！ も一度話してお呉れよ、ヨカナアンや、あたしが爲なくちやならぬことをね、云つてきかせてお呉れな。」

ヨカナアンは更に大きな聲でどなつた。

「ソドムの娘、おれの傍へよるな！ その代り、そちはヴェルで顔をかくして、頭の上に灰を撒いて、そして沙漠へ行つて、人の子をさがすがい。」
好奇心にかられて預言者の顔を見ることを望んだ王女サロメは今や彼の爲に戀に挿はれたのである。

「誰のことかえ、人の子つて？ お前のやうな奇麗な人かえ？ ヨカナアン

Salome

(34)

や。」

ヨカナアンはそれには答へないでいふ、「おれの後へ行くがい！ おれには宮殿の中で、死の天使の羽の音のしてゐるのがきこゑる。」

若きシリア人は今一度女王に哀願した。

「殿下、どうぞ奥へおはいりなされて下さいまし。」

とヨカナアンはまた聲をあけて叫ぶ、「わが主、神の御使、劍をもつて此處で何をなさるのです？ 此穢れた宮殿の中で、何をさがしておいでになるのです？ 銀の衣を着て死ぬべきあの男の、最後の日はまだ來ない筈だが。」

此時王女サロメは親しげに預言者に呼びかけるのであつた。「ヨカナアンや！」

とヨカナアンは直ぐにたづね返した。「誰だい、物をいつてゐるのは。」
生れて始めて清淨無垢といふことを、預言者ヨカナアンに見た王女サロメ

Salome

(35)

は、遂に彼に對する熱烈なる戀を語るのであつた。

『ヨカナアンや、あたしはお前の體に惚れてよ！ お前の體はまだ鎌のはいつたことのない、野原の百合のやうに眞白だ。お前の體は、山の上の雪のやうに、やがて谷間に下りて来る、ユデアの山の雪のやうに眞白だ。アラビアの女王の花園の薔薇でも、お前の體のやうに白くはないんだわ。アラビアの女王の花園、アラビアの女王の、あの香ばしい香料の花園の薔薇でも、あけ方の草葉の上に降りて来る足でも、海の胸の上に寝てる時の月の胸でも、…世の中のありとあらゆるものの中に、お前の體ほど白いものはないのだわ。あたしにお前の體をさはらしてお呉れな。』

さすがにヨカナアンは神の使である。一言の下に王女の戀を斥けてしまつた。

『下れ！ バビロンの娘！ 世の中へ罪惡の來たのは女の勢だ。おれに物を

いふな。おれはそちのいふことはきかない。たゞ神様の聲だけをきくのだ。』

サロメの情火は愈烈しくもゆるばかりである。

『お前の體は氣味が悪いわ。癩病の體のやうだ。毒蛇の匍つた塗壁のやうだ。さそりが巢をくつた塗壁のやうだ。穢ないものが一杯はいつた。白塗の墓のやうだ。こはいわ、お前の體はこはいわ。あたしの氣に入つたのは、お前の髪の毛だよ、ヨカナアンや。お前の髪の毛は、葡萄の房のやうだ。エドマイト人の國の、エドムの蔓から垂れさがつた。葡萄の房のやうだ。お前の髪の毛は、レバノンの杉の木やうだ、晝中に、獅子や泥棒に蔭をかしてやる、レバノンの大きな杉の木やうだ。月が姿をかくしたり、星が恐がる長い眞暗な夜でも、それほど黒くはないわ。森の中に住つてゐる沈黙でも、それほど黒くはないわ。世の中にお前の髪の毛のやうな黒いものはないわ。……お前の髪の毛にさはらしてお呉れな。』

ヨカナアンは依然として怒鳴るのである。「下れ、ソドムの娘！ おれに觸つて貰ふまい。神様のお寺を汚して貰ふまい。」
火の如きサロメの思に對してはヨカナアンの叫も何の効力もないのである。

「お前の髪の毛は恐いわ。泥だらけ、ほこりだらけだ。お前の額にのつかつてる、薊の冠のやうだ。お前の頸の周りに蟠つてる、黒い蛇の結び目のやうだ。あたし、お前の髪の毛は嫌ひだわ。……あたしの欲しいのは、お前の口だよ、ヨカナアンや。お前の口は、象牙の塔の上の、紅の紐のやうだ。チイルの花園に咲いてる柘榴の花は、薔薇の花よかつと赤いけど、お前の口ほどに赤くはないわ。帝王の近づきを知らせて、敵を恐らかす喇叭の赤い音もそんなに赤くはないわ。お前の口は葡萄酒桶の中にはいつて葡萄酒をふんでる杜氏の足よかつと赤いのね。お前の口は、お寺にやつて来て、坊さん達

に餌をもらつてる鳩の脚よかつと赤いのね。獅子を殺して、立派な虎を見て森の中から出て来た男の足より赤いのね。お前の口は漁師が海の底の薄明りの中で見つけて、帝王のためにしまつて置く珊瑚の枝のやうだ！……モアバイト人が、モアブの鑛山から堀出して、帝王の手にわたす朱のやうだ。朱で彩つて珊瑚でかざつた、波斯王の弓のやうだ。世の中にお前の口ほど赤いものは何んにもないわ。……お前の口をキスさせてお呉れ。」
熱烈なる王女の決心を見たヨカナアンは「ならん！ バビロンの娘！ ソドムの娘！ 決してならん。」

といふのであつたが、サロメはそれに對しては耳も傾けないのである。「あたし、お前の口にキスするのだよ、ヨカナアンや、お前の口にキスしないで置きはせぬよ。」
哀むべき若きシリア人は遂に戀を失つたことを自覺した。彼は悲痛な叫を

なして曰ふ。

「殿下、殿下、没薬の花園のやうな、鳩の中の鳩のやうなあなたは、此男を御覧なさいますな。あの男をお見つけなさいますな！ あの男に、あんな言葉をおかけなさいますな。私はきいて居るに忍びません。……殿下、殿下、あんなことを仰つしやつて下さいますな。」

けれどもサロメはシリア人の言を顧みないで、「あたしは、お前の口にキスするのだよ、ヨカナアンや。」

此言葉を耳にした若きシリア人は、「あゝ！」

と一言絶望の歎息を洩らして、われと我が胸に刃を刺しこんだ。そしてサロメとヨカナアンとの間に仆れたのである。

若きシリア人の友であつたヘロヂアスの扈從は云ふ。

「若いシリア人は自殺しちやつた！ 若い大尉は自殺してしまつた！ おれ

の友達だつたあの男は自殺した！ おれが香料の小さな箱と、銀の耳輪をやつた男は今自殺してしまつた！ おう、あの男は前から何か不吉なことが起るだらうと云つてたじやないか？ おれも前からそれを云つてゐた。そしてそれが今起つたんだ。さうだ。おれには、月が死んだものを探してるといふことが分つて居た。でも月の探してゐるのが、あの男だとは思はなかつた。マア！ おれはどうして、あの男を月から隠してやらなかつたんだらう？ おれが洞穴の中へ隠して置いてゐたら、月には見えなかつただらうになあ。」

と第一の兵士はサロメにつて、「殿下、若い大尉は、只今自殺いたしました。」

けれどもサロメは猶知らないものゝ如くに熱して、

「お前の口をキスさせてお呉れ、ヨカナアンや。」

ヨカナアンはまた叫び出した。「そちは、恐くはないか、ヘロヂアスの娘？

死の御使の羽の音が、宮殿の中で聞えたと、おれはそちに云はなかつたかい。それから死の御使が来はしなかつたかい？」

『お前の口を、キスさせてお呉れ。』

二人は互に思ひ／＼のことを云つてゐるのである。

『森淫の生んだ娘よ、そちを救ふことの出来るものが、たつた一人ある。おれがさきに云つた、あの一人じや、行つてその方をさがすがい、その方はガリリーの海で、短艇に乗つて居られる、そしてその弟子どもに話しをして居られる。海岸に行つて膝まづいて、名を云つて、その方を呼ぶがい。誰れでも、その方の名を呼ぶものゝところへ、來られるのだから、その方がそちのところへ來られたら、その方の足もとに膝まづいて、罪のお許しを願ふがいい。』

『お前の口をキスさせてお呉れ。』

『咀はれて居れ、不義の母の娘、咀はれて居れ！』

『あたしは、お前の口にキスするのだよ、ヨカナアンや。』

『おれは、そちを見たくない。おれはそちを見やせぬ、咀はれて居れ、サロメ、そちは呪はれて居れ。』

かう云つて預言者はたまらなくなつて水溜に降りて行くのである。

けれどもサロメは猶ほ其決心を語つて止まないのである。『あたしはお前の口にキスするのだよ。ヨカナアンや。お前の口にキスしないで置きはせぬよ。』

此時第一の兵士は若きシリア人の屍を見ていふ。

『何處か他のところへ、此死骸をもつて行かなくてはなるまい。王様は、御自分でお殺しなされた以外の、死骸を見るのが御嫌ひだ。』

ヘロヂアスの扈從は猶つゞけて追憶にふけるのである。

『あの男はおれの兄弟だつた、兄弟よりも近しいものだつた。おれはあの男

に、香料の一杯はいつた小さい箱と、瑪瑙の指輪とをやつたら、その指輪を始終指にはめて居た。夕方には、二人でいつも川邊の杏の樹の中を散歩することにして居た。するとあの男は、いつも自分の國の、色んなことを話すが癖だつた。いつも細い聲でものを云つて居た。あの男の聲は、笛吹きふえかきの笛の音のやうだつた。それからまた、あの男は川にのぞいて、自分の姿を見るのが大變好きだつた。おれはあの男がそれをするのを、いつも意見いけんをしてゐた。」

預言者を牢に入れて歸つて來た第二の兵士は第一の兵士に云ふ。

「本當にさうだ此死骸をかたづけなくてはならん、國王陛下の御目にとまつてはならぬ。」

と第一の兵士は「陛下は此處へお出でにはなるまい。決して此廣場へはゐらつしやらない。ひどく預言者を恐がつて居らつしやるんだもの。」

ヘロツド王は此時ヘロヂアス妃及び、有ゆる從者等を從へて登場する、やがてヘロツド王は曰ふ、

「サロメは何處に居るのだ？ 王女は何處に居るのだ？ あれに、宴席へ戻つて來いといつたのに、何故歸つて來なかつたのだらう？ ハア！ あすこに居るな！」

ヘロツド王が斯ふ云つてサロメの顔を見つめてゐると、ヘロヂアス妃は、
「あなた、あれの顔ばかり御覽なすつてはいけませんわ！ あなたは、始終あればつかりみつめてゐらつしやいますのねえ！」

けれどもヘロツド王はそれにはかまはないで、月を見ながら云ふのである。
「今夜は月が妙な姿をして居る、妙な姿をして居ないかねえ？ 氣のちがつた女のやうだ。行きつく先で、戀人をさがしてる氣のちがつた女のやうだ。そしてまた月は裸だ。すつ裸だ。雪はすつばだかの月に、着物を着せようと

してあせつてゐるが、月はそれをさせないのだ。裸で空に出て居る。酔つばらつた女のやうに、雲の中をよろりくと歩いて居る。……蛇度月は戀人をさがしてるのだ。酔つばらつた女のやうに、よろりくと歩いてはゐるかね？ どうも氣のちがつた女のやうだ、さうではないかねえ？」

とヘロヂアスは、「いゝえ、月は月のやうで御座います、それだけで御座います。奥へまゐりませう。……あなたは、此處でなされることは、何にも御座いません。」

と云つて王を連れ去らうとするのであるが、ヘロッドは頑としてそれに應じやうとしない。

「おれは此處に居る！ マネツセエ、あすこに敷物を敷け。炬火をつけえ。象牙のテエブルを出せ。それから碧玉のテエブルを出せ。此處は空氣がいゝ客たちと、もつと酒をのまう。羅馬皇帝の使者達に、出来る限りの敬意を表

しなくてはならない。」

従者等は即ち命を畏みて命ぜらるゝが儘にするのである。ヘロヂアスは即ち「あなたの此處にゐらつしやるのは、そのためには御座いません。」と云つて皮肉を云ふのであるが、ヘロッド王はそれをきかぬふりである。

「さうだ、いゝ空氣だ。サア、ヘロヂアス、客はおれ達を待つてゐるのだ。」

王はかう云つて歩きまわつてゐる折しも、誤つて死んだ大尉の血をふんだのである。と、「ヤア！ 滑つた！ 血をふみすべつたぞ！ 不吉な前兆だ。大變に不吉な前兆だ。どうして此處に血があるのだ。……それから此死骸は、此處で何をしてるのだ。此死骸は？ おれは埃及王のやうだと思ふかい、客に死骸を見せないでは、宴會をしたことがないといふ埃及の王のやうだと思ふのかい？ 誰の死骸だ？ おれは見たくない。」

かう云つて王が怒鳴りつけると、第一の兵士は云ふ、「大尉殿で御座りま

す。陛下、たつた三日許りに大尉になされました、若いシリア人で御座ります。

ヘロッド王は怪みながら、「おれは、あの男を殺せと云ひつけたことはな

ら。」

すると第二の兵士は、「自殺せられたので御座ります。陛下。」

ヘロッド王は即ち其故をきかないでは置かないのである。「どういふ理でじや？ おれは、あの男を大尉にしてやつたに。」

第二の兵士は畏まつて、「私共は存じませんで御座ります。陛下。然し自殺されたので御座ります。」

眞の自殺ときいてヘロッド王は羅馬の使節チゲリヌスに問ふ。

「それは變な事だ、おれは、自殺をするのは羅馬の哲學者ばかりだと思つた。本當ぢやないか。チゲリヌス。羅馬では哲學者が自殺するといふのは？」

チゲリヌスは則ち、恭しく、「自殺するものも御座ります。陛下。あれはストア派のもので御座ります。ストア派の連中は亂暴な奴等で御座ります。馬鹿な奴等で御座ります。私はあの連中を、全く馬鹿けたものどもと、思つて居ります。」

ヘロッド王は自殺の愚を笑つて云ふ。

「おれもちや。自殺などをするのは、馬鹿くしいことだ。」

チゲリヌスも亦自殺の愚を嘲けつて、「羅馬では、誰れもかれも、あの連中を笑つてをります。皇帝はあの連中に對して、諷刺の詩をおつくりになりました。その詩は到る處で、讀まれて居ります。」

ヘロッド王はシイザアを稱讚してやがて再び若きシリア人の自殺の理由について考へるのである。

「は、あ！ その連中に對して、諷刺の詩をお作りなされたかい？ 羅馬皇

帝はえらい人ぢやのう。何でも出来るのう。……若いシリア人が自殺したのはどうも變ぢや。自殺したのは氣の毒ぢや。非常に氣の毒ぢや。立派な男じやつたからのう。非常に立派な男ぢやつたからのう。あの男は非常に可愛い眼をしてをつた。おれはあの男が、あの可愛い眼で、サロメを見てゐるのを見たことがあるやうに思ふ。本當に、あの男は、あんまりサロメを見過ぎて居たやうに思ふ。」

嫉妬にかられてヘロヂアスは云ふ、「あんまりあの女を見つめて居るものが他にも御座いますわ。」

ヘロッド王はさもきこえぬものゝ如くである。

『あれの親父は國王であつた。おれはそれを國から逐拂つらつたのだ。それからヘロヂアスや。お前は妃であつたあれの母親を召つかひにしたのだ。それであの男は、いはば、まあ、おれの容分として此處に居たのだ、だから、』

おれはあの男を大尉にしてやつた。それが氣の毒なことに死んでしまつた。コラ！ 何故死骸を此處に打やつといたのだ。おれは見たうない——あちらへ片附ける！」

かういはれて一同はやうやく死骸を持ち去るのである。王は更に語をついで、「此處は寒い。風が吹いてゐる。風が吹いてゐるではないか？」

國王に對して殆んど何等の情愛も感じてゐないヘロヂアス妃はどこまでも落つき拂つたものである。「いゝゝゝ、風は吹いて居りませぬ。」

ヘロッド王の心中には何物かの影が姿をひそめてゐるのである。「確かに風が吹いてるといふに。……それから、何だか空で羽の音のやうなものが、大きな羽の音のやうなものが、おれにはきこえる。お前にはきこえないかい？」

ヘロヂアスはすけなく、「何にもきこえません。」

再びヘロッド王はいふ。「もうおれにも聞こえない。でもさきに聞こえた。」

あれは屹度風の吹く音であつた。今やんだのだ。然し、いやく、又聞こえる。お前には聞こえないかい？ 丁度羽の音のやうだ。」

「たしかに何にも聞えはいたしませぬ。あなたは御病氣なのですよ。奥へまゐりませう。」

「おれは病氣ではない。病氣なのはお前の娘だ。病人のやうな容貌をしてゐる。おれはまだ、あれがあんな蒼い顔をしてゐるのを見たことがない。」

「あれの顔を、御覽なさいませぬといふのに。」

ヘロツド王は遂に聲をあけて叫んだ。「おれに酒を注げ。」

従者は聲に應じて酒を持って来てつぐのである。王は更に云ふ。

「サロメ、来ておれと一處に少し酒を飲め。此處に芳醇な葡萄酒がある。羅馬皇帝がおれに呉れたのだ。おれに此コップが干せるやうに、お前の小さな赤い唇に、これをつけて呉れい。」

サロメは傲然として、「あたしは、渴いてはをりませぬ。」

ヘロツド王は妃ヘロチアスに向つて、「このお前の娘が、おれにどんな返事をするかお前きいただらうな？」

ヘロチアスは又得意げに、「あれのいつたのは尤もで御座います。なぜあなたは、あの子を始終見つめてゐらつしやるので御座います？」

やがてヘロツド王が、「熟れた果物をもて来い。」

といふと従者は果物をもて来て王座の前に置くのである。王はいふ。「サロメ来ておれと一處に果物をたべい。おれは果物についた、お前の小さい齒の跡を見るのが好きじや。此果物を、ほんの少し噛んでみい、それから残りはおれが食べよう。」

「あたしはお腹がすいて居ません。」

王に對するサロメの權幕は凄まじいものである。

王は再びヘロヂアスに云ふ、「お前は、此自分の娘を、どんな風に育て、来たか今分るだらう。」

「娘と私とは、王族の生れて御座います。それにあなたは、あなたのお父様は、駱駝追ひだつたのですわ！ それからまた、剽盗だつたのですわ！」

ヘロヂアスが斯く思ひ切つたを云ふと、

ヘロツドは怒つて呼ぶのである。「それは嘘だ！」

「あなたは、嘘でないといふことをよく御存じでらつしやいますわ。」

ヘロツド王は何とかしてサロメの歡心を買はんことを努めるのである。

「サロメ、来ておれの傍へ坐りや。おれはお母さんの王座へお前を坐らせてやらう。」

けれどもサロメは猶嚴として、「あたしは草臥ては居りません。」

ヘロヂアスは得意になつていふ。「ねえ、あの子が、あなたをどう思つてゐる

るか、お分りで御座いませう。」

ヘロツド王は此言を耳にして聊か狼狽したのである。「あれをもつて来い！—え、つと、何やらだつたな？ 忘れてしまった。さうだ！ さうだ！ 思ひ出した。」

再び、豫言者ヨカナアンの聲はひびき出した。

「見い！ 時刻が来た！ おれの豫言して置いた日がとう／＼やつて来た、神様がさう云つておいでだ。見い！ おれの云つた日は今日だ。」

ヘロヂアス妃はヨカナアンの聲を耳にすると戰慄を覺えるのである。「あの男を黙らせて下さいませ。私はあの聲をきくのがいやで御座います。この男は、始終私しの悪口をいつてをります。」

ヘロツド王はヨカナアンを惡みつゝも聊か彼に對して容謝する所があるのである。「あれは何にも、お前の悪口などを云つてはゐなかつた。それに、大

變えらい豫言者なんだ。』

ヘロヂアスは國王を嘲けつていふ。『私しは豫言者といふものを信じません。未來でどんなことが起つて来るか、そんなことが人間に分るものでせうか？ 誰にだつて分りはしません。それにあの男は、始終私の悪口ばかりいつてをります。でもあなたはあれを恐がつてゐらつしやいますのねえ。……あなたがあれを恐がつてゐらつしやることは、私しよく知つてゐますわ。』

さすがに辯解することを忘れないヘロツドは、『おれは、あの男を恐がつてはをらぬ。おれは、誰も恐がつては居ない。』

妃ヘロヂアスは、更に國王をなぢつていふ。『屹度、あなたは、あれを恐がつてゐらつしやいますわ。若し、あなたが、あれを恐がつてゐらつしやらないなら、半年も前から、あの男を渡して呉れと云つて、わい／＼云つてゐる猶人達に、なぜあなたはお渡しにならないので

せう。』

第一の猶太人は此時口を出して曰ふ。『本當に、陛下、私し共の手に、あの男をお渡しになりました方が、お宜しう御座りませう。』

ヘロツド王は斷乎として云ふのである。『もう澤山だ。おれはもう、そち達には返事をしてやつた。おれは、そち達の手には、あの男を渡しはせぬぞ。あれは聖者だ。あれは神を見たことのある男だ。』

第一の猶太人はヘロツド王の言にさからつていふ。『そんな筈は御座りませぬ。豫言者エリアスから後には、神様を見たことのあるものはをりませぬ。一番お終に神様を見たのは、エリアスで御座ります。近頃では、神様は姿を現はしになりませぬ。神様は隠れておいでなさります。だから、恐ろしい禍が、此の世に出て來たので御座ります。』

第二の猶太人も亦云ふ。『本當に、あの豫言者エリアスが、神様を見たか、』

どうかといふことも、誰にも分りは致しませぬ。ひよつとすると、エリアスが見たのは、只神様の影ばかりだつたかも知れませぬ。』

第三の猶太人も又口を出す。『いつだつて、神様の隠れてお出でなさる時はありやしない。神様はいつでも、何にでも姿を現はしておいでなさる。神様は善いものゝ中にも、悪いものゝ中にも、同じことに宿つておいでなさるんだ。』

これをきくと第四の猶太人は黙つてゐることは出来ないのである『そんなことを言つちやならぬ。それは大變危険な説だ。それはギリシヤの哲學を教へて居る、アレキサンドリアの學校から來た説だ。そして、ギリシヤ人は偶像信者だ。割禮さへ受けちや居ない。』

更にまた第五の猶太人は云ふ。『神様といふものは、どんな仕事をなさるか誰にも分るものぢやない。神様のやりかたは、甚だ神秘なものだ。吾々が惡

だといつて居るものが、善であるかも知れねば、善だといつてゐるものが惡であるかも知れない。何事も分るものぢやない。何しろ神様といふものは、大變強いものだから、吾々は必ず何にでも従はなくちやならない。神様は弱いものでも、強いものでも同じやうに、滅茶々々にしておしまいなさる。神様は誰のことも考へてはおいでなさらないから。』

第一の猶太人は之に賛成して、『本當にお前のいふ通りだよ。神様は恐いものだ。神様が、強いものでも弱いものでも、打碎いておしまいになることは丁度、人間が臼に入れて穀物を搗いてるやうなものだ。それはさうと、此男は決して神様を見たんぢやない。豫言者エリアスこの方、神様を見たものはありやしない。』

暫く我慢して此話をきいてゐたヘロヂアスは遂に叫び出した。『あれ達を黙らして下さいませ。退くつで御座います。』

けれどもヘロツドは却つて猶太人に云ふのである。『でも、おれは、あのヨカナアンといふ男が、そち等のいふ豫言者だといふことを聞いたが。』
第一の猶太人は答へていふ。『そんな筈は御座りません。豫言者エリアスの頃からは、もう三百年以上もたつてをります。』

ヘロツド王は猶しつこく云ふのである。『それでも、此男が豫言者エリアスだといふものがあるかも知れない。』

ナザレ人はヘロツド王に賛して云ふ。『たしかに、あの男は、豫言者エリアスで御座ります。』

第一の猶太人はどこまでも云ひはるのである。『いゝえ、どうあつても、あの男は豫言者エリアスでは御座りませぬ。』

豫言者ヨカナアンの聲は古水溜の中から又きこえるのである。『それ、その日が来た、主の日は来た。世界の救済者たるべき人の足音が、山の上に聞え

る。』

之をきいたヘロツドは、『あれは何のことだ？ 世界の救済者つて。』

チゲリヌスは答へて曰ふ。『あれは羅馬皇帝の稱號で御座ります。』

ヘロツド王は怪しみながらいふのである。『然し、羅馬皇帝はユデアへはやつて來られない。たつた昨日、おれは羅馬からの手紙を受取つたばかりだ。そんなことは何も書いてはなかつた。それから、チゲリヌス、冬中羅馬に

たお前は、そんなことを何にも聞かなかつた筈だ。それとも聞いたかな？』
『陛下、そのやうなことは何も承はりませぬ。私しは稱號のことを申したので御座ります。あれは羅馬皇帝の澤山ある稱號の一つで御座ります。』

『然し、羅馬皇帝が來られる筈はない。あの人は痛風がひどいのだ。足は象の足のやうだといふことだ。それからまた、國の事情も澤山ある。羅馬を去るものは羅馬を失ふのだ。あの人は來られやしないだらう。それはシイザア

は國王だから、来ようと思へば来られるだらう。けれども、あの人が、来られようなどとは、おれには思へない。」

と第一のナザレ人は云ふ。「豫言者が、あんなことをいつたのは、羅馬皇帝に關係したことで御座りません。」

之をきくとヘロッド王は云ふのである。「羅馬皇帝のことではない？」

「さうで御座ります、陛下。」

「ぢや、誰のことをいつたのかい。」

「出現なされたばかりの、メシアスのことをいつたので御座ります。」

此時第一の猶太人は横から、「メシアスはまだ現はれやなされぬ。」

第一のナザレ人は即ち、「メシアスは現はれて来られたんだ。そして今方々で、奇蹟を働いて居られる。」

ヘロヂアス妃は笑ひながら口を出して、「オホホホ！ 奇蹟だつて！ わた

しは奇蹟なんか信じやしないわ。わたしは、あんまり澤山みたんだもの。」と云つて扈從に。「わたしの扇をお呉れ！」

すると第一のナザレ人はむきになつて云ふのである。「その方は本當の奇蹟をなさるので御座ります。だから、ちよいとしたガリリーの小さい町にあつた婚禮の席で、あの方は、水を酒にかへられたので御座ります。その席に居た人が私しにそれを話したので御座ります。それからまたあの方は、カベルナウムの門の前に坐つて居た、二人の癩病人を、一寸觸つたばかりでお治しなされたので御座ります。」

第二のナザレ人は之に對して聊か異説をさしはさんでいふ。「いゝや、カベルナウムで治されたのは、盲目であつた。」

第一のナザレ人。「いゝや、癩病人だつたよ。然しあの方は盲目もお治しなされた。それからあの方は、山の上で天使と話をしておいでなされたんだつ

て。』

サドック人。『天使なんてものは居やしないよ。』

フアリゼイ人。『天使は居るよ。然し、それはその人が、天使と話をして居たといふことは本當とは思はぬ。』

第一のナザレ人。『あの方が天使と話をして居られるのを、大勢の人が見たのだよ。』

サドック人。『天使とではないよ。』

一同のおしやべりにたまらなくなつてヘロヂアス妃は、

『此人達は、マア、何といふ退屈なことを云つてるのだらう！ 馬鹿くし

い！』と云つて再び扈從に。『サア！ わたしの扇をお呉れ！』といふのであ

つたが扈從が扇を妃に渡すと、更に、『お前は夢を見る人の顔付きをしてるの

ねえ。夢を見てはいけないよ。夢を見るのは病人だけだよ。』といつて妃は扇

を以て扈從をかく打つたのである。

第二のナザレ人はまた、『それからまた、ヤイルスの娘の奇蹟が御座りま

す。』

と第一のナザレ人も亦、『さうだ、あれは確かだ。あれはだれでも嘘だとは

云へない。』

ヘロヂアスは即ちいふ。『この人達は氣がちがつてるのだ。あんまり長い

間月を見てゐたのだ、黙るやうに仰つしやつて下さりませ。』

ヘロッド王は妃には何の答へもしないで却つてナザレ人に云ふのである。

『ヤイルスの娘の奇蹟といふのは、何だね？』

第一のナザレ人は畏みながら答へる。『ヤイルスの娘は、死んで居たので御

座ります。あの方はその死んだ娘をお生かしなされたので御座ります。』

ヘロッド王は更に、『その男は死人を生きもどらせるのか。』

第一のナザレ人再び繰返していふ。「さうで御座ります、陛下。あの方は死人をお生かしなされます。」

とヘロツド王は嚴然と云ふのである。「おれは、その男に、そんなことをさせたくない。おれはその男の、そんなことをするのを禁ずる。死んだものを生かすやうなことは、誰にだつて許しはせぬ。その男を見つけたして、死人を生かすやうなことは禁ずると、傳へてやらなければならぬ。今此處に居るのだ。その男は。」

第二のナザレ人は答へて、「あの方は、何處にでもおいでなされます。陛下けれどもあの方をみつけるのは六ヶ敷いことで御座ります。」

と第一のナザレ人は、「あの方は、今サマリアに居られるといふことで御座ります。」

第一の猶太人は云ふ。「若し、その人がサマリアに居るなら、それがメシア

スでないといふことは、容易にわかることだ。メシアスは、サマリア人の所に現はれて來られる筈はない。サマリア人は呪はれて居るのだ。お寺へ何にもあけたことはありやしない。」

第二のナザレ人は云ふ。「あの方は、一三日前にスミルナをお立ちになつた今のところでは、エルサレムの近所に居られるだらうと思ふ。」

第一のナザレ人はまた、「いや、エルサレムには居られない。おれは今エルサレムから來たばかりだ。二月ばかり、あの方からは何にも便がなかつたのだ。」

ヘロツド王は遂に云つた。
「かまやしない！ 兎も角も、あの男を見つけさせて、おれはその男に、死人を生き返へらせることを許さぬと云はせよう！ 水を變へて酒にするとか癩病人や盲目をなほすとか、……そんなことは自分でしたければしてもいゝさ、そんなことに對して、おれは何にもいひはせぬ。本當に、癩病を治すな

んてことは善いことだと思つてる。けれども、死んだものを生き返へらせることは誰にも許しやせぬ。死んだものが返つてなんぞ來ては、恐ろしいことだ。」

ヨカナアンの聲は再びヘロヂアスを呪つて云ふ。「おゝ！ いたづら者！ 賣女！ おゝ！ 金の眼と、びかくする臉をもつた、バビロンの娘！ 神様がさうおつしやるぞよ、あの女に對して、澤山の人を集まらしてやれ。人に石を拾つて、投げつけさせてやれ。……」

とヘロヂアスは、「あの男を黙らせて下さりませ。」

ヨカナアンの聲はなほ云ふ、「隊長どもに、劔であの女を刺させてやれ、橋の下に壓しつけて、あの女を碎かせてやれ」

ヘロヂアスは更に王に對して云ふ、「いゝゝゝ、それでも忌々しう御座います。」

ヨカナアンの聲は猶つゝいて云ふのである。「かうして、世の中から、ありとある穢らはしいことを拭きとつてしまひたいのだ。そしてあらゆる女が、あの女の罪をまねないやうにしたいものだ。」

ヘロヂアスは又王に對して訴へるのである。「わたしに對して、あれの云ふことを御聞きで御座いませう？ 自分の妻を誹する男を、あなたは許してお置きになりますのですか？」

ヘロッドはなだめるやうに云ふ。「あの男はお前の名を云いはしなかつた。」

ヘロヂアスは即ちなざるやうな態度で、「それがどうしたといふので御座います？ あの男が誹しらうと思つて、捜してゐるのは、わたしだといふことは、よく御存じの筈で御座います。そして、わたしはあなたの妻で御座います。さうでは御座いませんか？」

ヘロッド王は妻に對して云ふ、本當に、可愛いけだかいヘロヂアスや、お

前はおれの妻じや。そして、その前には、お前はおれの兄弟の妻であつた。』
 『あの人の腕から、わたしをおもぎとりになつたのは、あなたで御座います。』
 『本當に、おれの方が強かつた。……然し、その話はすまい。おれはその話
 はしたくない。話したいのは、豫言者がいつた恐ろしい言葉の原因だ。大方
 その爲に、不吉なことが起るのかも知れない。いや、このことはもう話さぬ
 ことにしよう。けだかいヘロヂアスや、お客のことを忘れて居たなあ。こり
 や、お前おれのコップに一杯ついでくれい、銀の大杯にも、それからガラス
 の大杯にもついでくれい。おれは羅馬皇帝のために飲まう。此處に羅馬の方
 々が居られる。一同羅馬皇帝のために飲まなくちやならぬ。』

一同は即ち、『羅馬皇帝！ シイザア！』と云つてシイザアの萬歳を唱へた
 のである。

やがてヘロツド王はサロメを心配していふ。『お前は娘の顔を見ないかい？』

何てまあ蒼い顔だらう。』

『あの子が蒼くつても、蒼くなくつても、それがあなたに、どうしたといふ
 ので御座います？』ヘロヂアス妃は平然としていふのである。

きまり悪けにヘロツドは繰返していふ。『おれはまだ、あれがあんなに蒼い
 顔をしてるのを見たことがない。』

王がなほ熱心にみつめてゐるのを見ると、ヘロヂアスはどうしてもやけな
 いではゐられないのである。『あなたは、あれをお見つめなされてはいけませ
 ん。』

物凄いやカナアンの聲は又してもきこえゑる。『その日には、髪の毛の包み
 布のやうに、太陽が黒くならう。月は血のやうに赤くならう。熟した無花果
 が樹から落ちるやうに、天の星屑は地上に落ちるだらう。そして地上の帝王
 達は恐をなすだらう。』

恐るべき罪をいだいたものにとつて、何でこの聲が平氣できいてゐられよう。ヘロヂアスは云ふのである。『オヤー、オヤー、わたしは、あの男のいふやうに、月が血のやうに赤くなつて、星が熟した無花果のやうに落ちるといふ、その日が見たいものだわ。此豫言者は、酔拂ひのいふやうなことをいつてるわ。……それでもわたしは、あの聲の響が耐へられないんですの、わたしはあの聲がきらひですわ。黙らせるやうにして下さいましな。』

ヘロッド王は只怪しみながらいふのである。『おれはさうしたくない。あの男のいつてることは、おれには分らない、けれども、あれは何かの前兆であるかも知れない。』

罪あるものに限つて、却つて自分の罪に對しては不信の念を深くするものである。『わたしは前兆なんか信じませんわ。あの男は酔拂ひのいふやうなことを云つてるんですもの。』

『あの男は、神の葡萄酒に酔はらつてるのかもしれない。』

『神の葡萄酒つて、どんな酒で御座いますの？ どんな葡萄酒からとるので御座いますの？ どんな酒樽の中でございますの？』

この後ヘロッド王はのべつにサロメを見つめて、その眼は血にもえるやうに輝いてゐるのである。『チゲリヌス、この間羅馬に居られた時分に、皇帝と話されたといふあのことは……？』

チゲリヌスが王の言葉をうけて、『何のことで御座りますか、陛下？』

といふと、ヘロッド王は聊か狼狽の様にて、『何のことだつて？ あゝ、己はお前さんに何かたづねたのだつたね、さうではなかつたかいの？ お前さんにきかうと思つたことを忘れてしまつたわい。』

王の顔を見るとヘロヂアスはまた云ふのである。『あなたは、また娘の顔を見つめてばかりゐらつしやいます。あの子を御覽なすつてはいけません。も

うさつきも、さう申しましたのに。」
 きまり悪けであるが、而も何となしに一寸した武器でもつかみ得たもの、
 やうに、ヘロッドは、「お前は他のことは何にも言やあしないなあ。」
 ヘロヂアス妃はなほ頑強に云ふのである、「わたしは、もう一度それを申し
 ます。」

するとヘロッド王は話題を轉ぜんとして、「それから、あのお寺の復舊のこ
 とを、みんなが大變八ヶ間敷いつて居つたが、あれはどうなるのかねえ？」
 神殿の帳がなくなつたとかいふことだつたが、さうではなかつたかねえ？」
 けれどもヘロヂアスは常に其反對に、何でも用捨なく王の急所をねらつて
 少しも憚らないのである。
 「それを盗んだのは、あなたで御座いました。あなたは出鱈目ばかりいつて
 るらつしやる。わたしは此處に居りたう御座いません。奥へまゐりませう。」

暫くサロメの美しさに見とれてゐたヘロッド王は遂はサロメに向つて舞を
 せまり出したのである。「おれに舞ふて見せい、サロメ。」
 けれどもヘロヂアスは娘をして王の願に應ぜざらしめんといふのである。
 「わたしは舞はせはしませぬ。」

果然サロメは云つた。「舞ふのは厭で御座います。」
 ヘロッド王は更に、「サロメ、ヘロヂアスの娘、おれに舞ふて見せい。」
 ヘロヂアスは又、「あれの氣にまかせてやつて下さいまし。」
 ヘロッドは遂に命を下した。「サロメ、おれは、お前に舞へと命ずる。」
 サロメはまた同じやうに、「あたし、舞ふのは厭で御座います。」
 ヘロヂアス妃は笑ひながら誇りけにいふ。「ねえ、あなたの仰をよくきゝま
 すでせう。」

ヘロッド王はまゝよと云つた風である。「あれが舞はうと舞うまいと、それ

がおれに何だ？ 何でもないことだ。今夜はおれは愉快じや、おれは非常に愉快じや、おれはこれまで、こんな心持のよかつたことはない。」

第一の兵士は此時蔭にあつて云ふ。「王様は陰氣な顔をしておいでなさる。陰氣な顔をしておいでなさるではないか。」

第二の兵士が之に應じて、「さうだ、陰氣な顔をしておいでなさるなあ。」
ヘロッド王は眞に愉快けに物語るのである。

「どうして、おれが愉快でなからうか？ 世界の主であり、萬物の主である羅馬皇帝が、よくおれを可愛がつて下さるのだもの。丁度今、此おれに、至つて貴とい贈物をしてくれたところだ。それからまた、おれの敵であるカツパドシアの王を、羅馬へ呼寄せることを約束してくれられた。ひよつとすると、あの王を、羅馬で磔刑にでもするといふのかも知れない。羅馬皇帝は自分のしたいと思ふことはなんでもすることが出来るのだから、本當に羅馬

皇帝は君主だ。だから、おれが愉快な理由が分るだらう。本當におれは愉快なんだ。おれは今まで、こんな愉快だつたことはない。おれの幸福を傷けることの出来るものは、世の中に何にもありやしない。」

例のヨカナアンの聲がまた響きだした。「あれは此玉座に坐つて居よう。緋と紫の衣をきて居よう。手には、自分の身の誹謗の湛えた金のコップをもつて居よう。そして主の御使に打碎かれてしまはう。蛆蟲は食はれてしまはう。」
ヨカナアンの聲はヘロヂアスにとつては獅子心中の蟲の感があるのである。

「あの男が、あなたのことを云つてゐるのを、おき、で御座いませうね。蛆蟲に食はれておしまひなさるといつて居ります。」

自から呪はれて居りながらヘロッド王は平氣なものである。「あれの云つてゐるのは、おれのことではない。あの男は、決しておれの悪口はいはない。」

あれのいつてゐるのは、カッパドシアの王のことだ。おれの敵であるカッパドシアの王のことだ。蛆蟲に食はれるといふのは、あの王のことだ。おれのことではない。おれが、兄弟の妻を妻にしたこと以外には、此豫言者は、まだついでおれの悪口をいつたことはない。それは、あの男のいふ通りかも知らない。なぜだつて、本當をいへば、お前は石女だからなあ。」

「わたしが石女ですと？　あなたがそれを仰つしやるのねえ。終始わたしの娘ばつたり見てゐらつしやるあなたか、御自分の慰みのために、あれを舞はせようとなさるあなたがねえ？　それを仰つしやられた義理では御座いますまい。わたしは一人は子供を生んだので御座いますよ。あなたに子供がないので御座いますのねえ。うます女といふのは、あふたのことで御座います。わたしでは御座いませんわ。」

「黙れ！　女！　お前はたしかに石女だよ。おれの子供は、お前には一人も出来なかつた。そしておれ達の結婚は、本當の結婚ではないと、豫言者がいつて居る。道に外れた結婚、禍の起る結婚だといつて居る。……あれのいふ通りかも知れない。屹度あの男のいふ通りだ。でも今はそんなことを云つてゐる時ではない。おれは今愉快でありたいのだ。本當におれは愉快だ。物足りないと思ふことは何にもない。」

「今夜、あなたが、それほど上機嫌でゐらつしやるのは、わたし嬉しう御座います。いつもはさうではおありなさらないんですもの。でも、もう晩う御座います。奥へまゐりませう。明日は日の出がたに、獵に出るのだといふことをお忘れになりますな。羅馬皇帝の使者達に、出来る限りの敬意を表さなければなりません、さうでは御座いませぬか？」

「ヘロッド王の顔色はますます陰鬱になるばかりである。」

第二の兵士は、「何てマア、王様は陰氣な顔をしてゐらつしやるだらうなあ」
 第一の兵士も、「さうだ、陰氣な顔をしてゐらつしやるな。」

ヘロツト王は又してもサロメに向つて舞をせがむのである。

「サロメ、サロメ、おれに舞うて見せい。頼むから舞うて見せい。今夜はおれは悲しい。さうだ、おれは今夜は悲うてならぬ。おれは此處へ來た時に、吉相の悪い血を踏んだ。それから、空には羽音のするのを聞いた、たしかに巨い羽音をきいた。おれには何のことやら分らぬ。……今夜はおれは悲しいのだ。だからおれのために舞うてくれい。おれの爲めに舞うてくれい。サロメ、頼むから、そちがおれのために舞うて見せりや、何でも欲しいと思ふものをいへ、この國の半分でも、お前にやるわ。」

サロメは忽然として身をのして云ふのであつた。「本當にあたしの欲しいものをなんでも下さるのでせうか？」

サロメの此有様を見るとヘロヂアスは黙つてゐることは出来ない。「舞ふのではありませんよ、サロメや。」

ヘロツト王は誓ふが如くに、「何でも、この國の半分でも。」

サロメは更に念を押した。「お誓ひなさいますのね？」

ヘロツト王は今は夢中である。「誓ふよ、サロメ。」

ヘロヂアスはなほも、「舞ふのではありませんよ、サロメや。」

サロメは王の最後の言葉を要求して止まないものである。「何にかけてお誓ひなさいますの？」

ヘロツト王は有ゆるものにかけて誓ふのである。「命にかけて、おれの冠にかけて、神々にかけてぢや。それが只一度おれのために舞ひさへすれば、お前の望むものは何でも呉れてやる。此國の半分でもくれてやる。サア、サロメ、サロメ、おれの爲に舞うて見せい。」

サロメはどこまでも用心深いのである、『あなたはお誓ひになりましたのねえ。』

『おれは誓つたぞよ、サロメ。』
『あたしの欲しいものをみんなね、あなた國の半分でもね。』

ヘロヂアスは今一度サロメを止めんことを試みた。『サロメや、舞うのではありませんよ。』

ヘロツド王の心は心配と嬉しさと恐との混乱にもがいてゐるのである。『この國の半分でもだよ。そちが此國の半分でも欲しいといふことであるなら、サロメ、そちは女王として、さぞ美しいことであらうぞよ。あれは女王として美しいものではなからうかな？ おゝ！ 此處は寒い！ 氷のやうな風が吹いてる、それから、おゝ、きこゑるわ……どうして空で羽音がきこゑるのだらう？ はゝあ、廣場の上の方を飛んでる鳥が、大きな黒い鳥がゐるのか

も知れないな。どうしておれに見えないのだらう、此鳥が？ あの羽の音は凄い音だ。羽ばたきで起る風の音は凄い音だ。つめたい風だ。いや、さうでない、つめたくない、熱いぞ。おれは息がつかまる。おれの手に、水をかけてくれい。食ふから雪をくれい。マンテルをぬがせてくれい。早く！ 早く！ マンテルをぬがせてくれい。いや、マアほつといてくれ。おれをいためるのは、この飾環だ、薔薇の飾環だ。花が火のやうだ。おれの額がやけてしまつた。』かう云つて王は頭の上から花環をもぎとつて、テエブルの上に投げつけて更に語をつゞけていふ。『あゝ！ やつと息が出来る。何てあの花環の赤いことだ！ 布についた血のやうだ。いやかまやせぬ。眼に見えるものごとに意味をつけてはならないで、なあ。それじゃ、とても生きちやゐられやせぬ。血の跡でも、やつぱり薔薇の瓣のやうに立派なものだと、いつた方が増しだらう。なんでもさういつた方がずつと増しだて……然しこのことはいふ

まい。もうおれは愉快じや、非常に愉快じや。おれに愉快であるべき権利がないかね？ お前の娘はおれのために、これから舞ふところだよ。そちは、おれのために舞うてくれないかね、サロメ？ そちはおれのために舞ふと約束したなあ。』

ヘロヂアスは遂に母としての力を用ひんとするのであつた。『わたしは舞はせは致しません。』

何物か決心する所あるが如きサロメは斷乎としていふのであつた。『あたしはあなたのために舞ひますわ。』

ヘロッド王は喜にあふれた心をもつて云ふのである。『娘の云つたことを、お前は聞いたであるな。あれはこれから、おれのために舞ふところだよ。おれのために舞ふつて、でかしたぞ、サロメ。そしてそちがおれのために舞うたら、欲しいものをくれろといふことを、忘れまいぞよ。そちの欲しいもの

は何でもやる。此國の半分でもやる。おれは誓をしたのだ、さうぢやないか？』

サロメはまだちつとして、『あなたはお誓ひなさいましたのね。』

ヘロッド王はつゞけていふのである。『そしておれは、まだ誓を破つたことはない。おれは誓つたことを守らぬやうな人間ではない。おれは嘘をつくことを知らぬ。おれは自分の言葉の奴隷だ。そしておれの言葉は國王の言葉だ。カッパドシアの王は、始終嘘をつく。だがあれは本當の國王ではない。あれは臆病者だ。それからまた、あればおれに金を借りて返さない。あれはおれの使者に無禮さへした。あれは毒舌をはいた。けれども、あれが羅馬へ行つたら、皇帝は磔刑になさるだらう。屹度羅馬皇帝はあれを磔刑になさるだらう。それから、もしさうでないにしても、あれは蛆蟲に食はれて死ぬるだらう。預言者がさう云つてゐた。サア！ どうして、そちはぐづぐづするのじ

や、サロメ？』

催促されたサロメは、『あたしは女たちが香料と七本のヴェエルをもつて来て、沓を脱がして呉れるのを、まつてるので御座いますわ。』

女ども香料と、七本のヴェエルをもつて来て、サロメにわたし、やかてその沓をぬがせるのである。

サロメが沓をぬぐのを見ると、ヘロツドは、『あゝ、裸足で舞ふのだな。それはいい！ それはいい、そちの小さい足は白鳩のやうだらう。木の上で舞うてる小さい。白い花のやうだらう。……いや、いや、あれは血の上で舞ふのだな。そここのところには血がこぼれてゐる。血の上で舞うてはならない。悪い前兆かも知れない。』

頻りにサロメをして舞はざらしめんとしたヘロヂアスも、かうなつてはせんすべはない、『あれが血の上で舞へば、それがあなたにどうしたといふので

御座いますの？ あなたは、その中にすつぷりおはいりなさいましたわ……』

とヘロツド王は月を眺めていふ、『それがおれに、どうしたといふのかい？

マア！ 月を見い！ 赤うなつた。血のやうに赤うなつた。はあ！ 本當に

豫言者のいつた通りだ。あれは月が血のやうにならうといつた。さういひはしなかつたかねえ？ そち達はみんな聞いた筈だ。そして今、月が血のやうに赤くなつた。そち達には見えないかねえ？』

ヘロヂアスは相變らず皮肉である、『ええ、ええ、わたしにはよく見えますわ。それから星は熟した無花果のやうに落ちるところです。さうぢや御座いませんの？ それから太陽は髪の毛をつゝむ袋のやうに黒くなるところです。それから地上の帝王は恐がつて居ます。その帝王の恐がるのだけは、少くも誰にでも見えますわ、たつた一生に一度だけ、預言者のいつた通りでしたわ。地上の帝王は恐がつて居ますわ。……奥へまゐりませう。あなたは御病氣で

御座いますよ。皆さんは羅馬へ歸つて、あなたが、氣がちがつてると仰つしやるので御座いませう。奥へまゐりませう、ねえ。」

破れ鐘のやうなヨカナアの聲は、又しても恐ろしくきこえる。「エドムから来る此男は誰だ？ 紫に染めた衣を着て、着物の美しさに光り輝いて、ひどく偉らさうにあるいて来る此男は誰だ！ 何のために、そちの衣は緋に染めてあるのちや？」

聲に恐れを感じないではゐられないヘロヂアスは、「奥へまゐりませう。あの男の聲はわたしを氣ちがひに致します。あの男がのべつに、しやべつてる間は、娘を舞はせはしませぬ。こんな風に、あなたがあれを見つめてゐらつしやる間は、わたしはあれを舞はせはしませぬ。どうしても、わたしは舞はせはしませぬわ。」

かう云つてヘロヂアスが立上つて逃げようとするのを制して、ヘロツド王

は、

「立つな、オイ、こりや、立つても何の役にも立ちませぬ。あれが舞うてしまふまでは、おれは奥へはいりませぬ。舞へ、サロメ、おれのために舞へ。」

ヘロヂアスは又しても止めて見るのであつた。「舞ふのではありませんよ、サロメや。」

サロメは此時、「サア、あたし舞ひますわ。」と云つて七つのヴェイルの舞を舞ひ出したのである。芳芬風なきに散じ、七色のヴェイルと乳の蔽ひと腰にまとうた飾りとは折々にキラ／＼と光り輝いて、裸形の姿の美しさは見るものをして惱殺せしめないでは置かなかつたのである。

ヘロツド王は嬉しげに誇りけにいふ。「おゝー！ 見ごとだ！ 見事だ！ あれは、お前の娘は、おれのために舞うただらうがや、近うよりや、サロメ、」

近うよりや、お前に褒美をくれてやるから。お、おれは、舞ふたものは充分にしてやる。そちには立派にしてやるぞよ。そちの心に欲しいと思ふものを呉れてやる。何が欲しいのじや？ いつて見い。」

サロメは跪まづいて静かにいふのである。「銀の大皿に入れて、すぐもて来させて頂きたう御座います……」

ヘロツド王は只笑ひながら、「銀の大皿に？ うむ、よし、銀の皿へだな。」

あれは可愛らしいことをいつてる、さうではないか！ 銀の大皿の中へ、何が欲しいといふのじやな、オ、可愛い、美しい、サロメや、ユデヤ中の、どの娘よりも美しいサロメや？ 銀の大皿の中へ、何がもてこさせて欲しいといふのぢやな？ おれに云つて見や。どのやうなものでも、そちに持てこさせてやる。おれの寶はそちのものじや。何じやね、サロメ？」

サロメは立ちあがつて嚴然として、「ヨカナアンの首です。」

ヘロヂアス妃は狂喜して「お、お、よう、云つたのねえ、サロメや。」

愕然として驚いたヘロツドは殆んどいふ所を知らなかつた。「いや、いや！」

ヘロヂアス妃はまた繰返した「よういつたのねえ、サロメや。」

ヘロツド王はヘロヂアス妃の煽動に恐れてゐるのである。「いや、いや、サロメ、そちはそれが欲しいのではない。お母さんのいふことなどをきくものではない。お母さんは、いつでも悪いことばかり教えてるのだ。お母さんなんぞ構ふものではないぞ。」

けれどもそれは母の煽動に出たものではなかつた。彼女はむしろ死によりて成らぬ懸の満足を望んだのである。

「あたしはお母様にかまひはしませぬ。銀の大皿の中へ、ヨカナアンの首を入れて下さいましといふのは、あたし自分の慰のためで御座います。あなたはお誓ひなさいました、陛下。あなた御誓言をなすつたことを、お忘れなさ

いますな。」

ヘロツド王がヨカナアンの首をとることはあたり前ならば何でもないのである。けれども王は彼が預言者であり、神の使であるといふことに聊か恐をなしてゐるのである。「おれは知つてをる。おれは神々にかけて誓つた。おれはそれをよく知つてをる。然しおれは頼む、サロメ、何かほかのものを望んで呉れ。この國が半分欲しいといつて呉れ、さうすれば、おれはそれをそちにする。けれど、そちが今呉れろと云つたものは、どうぞ欲しいといつて呉れるな。」

サロメの望は到底動かし得べきものではない。「どうぞ、ヨカナアンの首を下さいまし。」

ヘロツド王は當惑の體である。「いや、おれはそれが望ましくはない。」サロメが最初に王をして誓はしめたのは今にして思へば恐ろしい企みであ

(98)

つたのである。「あなたはお誓ひなさいましたでせう、陛下。」

ヘロヂアスもいゝ氣になつて云ふ。「さうだ、あなたはお誓ひなさいました。だれもかれも聞いて居ります。あなたは、みんなの前でそれをお誓ひになりましたわ。」

ヘロツド王は聊か怒つて、「黙れ！ おれはお前にいつてるのではない。」

王の困惑と憤怒とは却つてヘロヂアスにとつては痛快の種である。「ヨカナアンの首が欲しいつて、娘はよいひました。あの男はありとあらゆる悪口をわたしに云ひました。わたしに對してとんでもないことを云ひました。あの子が母親を、よう大事にしてゐることは、誰にでも分りますわ。あとへ引くのではないよ、サロメや、お誓ひなされたのだよ、お誓ひなされたのだよ。」

ヘロツド王は何とかしてサロメの心を他の物質によつて和けんとするのである。けれどもサロメは物を戀してゐるのではない。清淨無垢な身と心に對

(99)

して残忍なる戀をたくらんでゐるのである。

「黙れ、おれに物をいふな……サア、サロメ、しつかりして呉れ。おれはそちに、一度としてつらくはなかつた。いつもそちを可愛がつて居た。……あんまりそちを可愛がつてゐたかも知らぬ。だから、これ丈はほしいといつて呉れるな。これは物凄いいことだ、おれに呉れろといふのは、恐ろしいことだ。屹度そちは巫山戯てるのだと思ふがね。胴から離れた人間の首といふものは、見ても心地のよくないものじゃ、さうではないかね？ 處女の眼がそんなものを見ようといふのは、穩かなことではない。それを見て、そちにどれ程の樂みがあるのか？ 何にもない。いや、それはそちの欲しいものではない。おれのいふことを聞け。おれは大きな綠玉をもつてゐる、羅馬皇帝の愛人がおれに贈つた、大きな圓い綠玉じゃ。そちが此綠玉を眼にあてると、非常に遠方にある物事が見える。羅馬皇帝が曲馬に行かれる時には

自分でそんな綠玉をもつて出かけられる。でもおれの綠玉は、それよりもずつと重いのだ。巨いことはよく分つてゐるのだ。世界中で一番大きな綠玉だ、そちは欲しいじやろ、どうじやね？ それを呉れいといへ、さうすりや、そちに呉れてやる。」

斯の如き戀に焦れてゐるものに對して、斯の如き物質の提供が何の價をなすものであらう、サロメは只頑として其望を主張するのである。「ヨカナアンの首を下さいまし。」

ヘロッド王はなほも徒らに説んとするのである。「そちはおれのいふことを聞いてゐない。聞いてゐない。我慢して、おれのいふのをきいて見い、サロメ。」

ヘロッド王の願はもはやサロメにとつては何でもないのである。「ヨカナアの首をね。」

ヘロッド王は遂にサロメに對する戀をかたるのである。

「いや、いや、そちはそれが欲しくはないのだ。そちはおれをこまらせるために、さういふのだ、おれが今夜すつとそちを見つめてゐたものだから。本當に、おれは今夜すつと、そちを見つめてゐた。そちの美しさが、おれを迷はせたのだ。そちの美しさが、おれを堪らなく迷はせた。それでおれは、あんまりそちを見つめたのだ。だが、おれはもうそちを見つめない。物でも人でも、見つめてはならぬものじや。見つめていゝのは鏡ばかりじや、鏡は影を見せるばかりじやからな。おゝー おゝー 酒をもて來て呉れい！ おれは渴いた。……サロメ、サロメ仲をよくしよう。サア來や！……えゝとー何をいふのだつたかしら？ 何だつたかしら？ おゝー 思ひ出したー……サロメ——いや、マア、もつと近う寄りや、きこえないかもしれないから——サロメ、そちはおれの白孔雀を知つてゐるな、庭の中で、天人花と高い糸

杉の間をあるいてる、あの美しい白孔雀をな。あれどもの嘴は、金がぬつてある。食べる穀物も金がぬつてある。それから孔雀の脚は紫に染めてある。あの孔雀が鳴く時には、雨が降る、尾をひろげる時には、天に月が出る。あの鳥は糸杉の樹と、黒い天人花の間を、二羽宛歩いてゐる。そしてどちらにもおのおの奴隷がつけてある。時によると樹を飛び越えることがある。また時によると、草の中にしやがんだり、池のぐるりにしやがんだりする。世の中にあれほど珍しい鳥はない。世界の帝王にもあれほど珍しい鳥をもつてるものはない。屹度羅馬皇帝でも、あんな奇麗な鳥をもつてはおられぬ。おれはあの孔雀を五十羽ほどそちにやらう。そちの行く處へは、どこへでもあの鳥はついて行くだらう。そしてそちがあの鳥の真中にゐると、大きな白雲の真中に包まれた月のやうだらう。……おれはそれをみんなやらう。おれは百羽ばかりもつてゐる。世界中にも、おれのもつてるやうな孔雀をもつた

國王は一人もないのだ。然しおれはそれをみんなそちにやらう。たゞ、そちはおれの誓をゆるしてくれなくては、そしておれに今呉れろといったものを呉れいといつてはならぬぞよ。』

國王はかう云つて酒をのみ干した。

一旦誓つた誓を許してくれと云つたとて、それが今更何にならう、サロメは相變らず繰返すのである。『ヨカナアンの首を下さいまし。』

ヘロヂアスはサロメに向つて、『よう云つたのね、サロメや！』と云つて更に王に向つて云ふ。『あなたと云へば、孔雀では馬鹿になつてゐらつしやいませのね。』

ヘロッド王は遂にサロメに向つて哀願したのである。『黙れ！ いつもお前は、いつもほざいてる。猛獸のやうにほざいてる。ならんぞ。お前の聲には、おれは退屈してしまふ。黙つとれといふに。……サロメ、そちのして

ることを考へて見い。此男はひよつとすると、神の御使かも知れぬ。神の指は此男に觸つたのだ。神が恐ろしい言葉を、あの口に入れたのだ。宮殿の中でも、沙漠の中と同じ様に、神がしよつちう、あの男と一所にをられるのだ。……少くもさうであるかも知れぬ。誰にだつて分るものではない。神があつた男を助けて、一所に居るといふことはないとも限らぬ。それに又、あの男を殺したとなると、何かの不幸がおれに起つて來ないともいへぬ。兎に角自分の死ぬる日には、誰かに禍が起るだらうと、あの男もいふて居た。その禍を蒙る人は、おれより他のものではあるまい。思ふても見るがいゝ、おれは此處へ來る時に血を踏みすべつた。そして又、空では羽の音、大きな羽の音のするのを聞いた。みんな至つて悪い前兆だ。それからまだ他にもあるかも知れぬ。おれは見はしないけれど、屹度まだ他にもあるかも知れぬ。のう、サロメ、おれに禍の起つて來るのを、そちも望みはすまいね？ そちもそれを望

みはすまい。そうすりや、おれのいふことをきいて呉れい。」
 ヘロッド王が千萬言を費したところでサロメの決心と戀とは遂に如何とも
 することが出来ないのである。「ヨカナアンの首を下さいまし。」
 ヘロッド王もほとく困つてしまつたが、更に一たび徒らに叫ぶのであつ
 た。

「おゝ！ そちはおれのいふことを聴かないのだな。静かにせい。おれは—
 —おれは落つて居る。おれは落つき拂つてゐる。きいてくれ。おれは此宮
 殿の中に、寶ものをかくしてゐる—そちのお母さんでもまだ一度も見たこ
 とのない寶だ、びつくりするやうな寶だ。四列にならべた眞珠のカラーをも
 つて居る。銀の光で月をつなぎ合せたやうなカラアだ。月を五十も金の網の
 中に引つかけたやうだ。どつかの女王が、象牙のやうな胸の上につけて居た
 ものだ。そちがそれをつけると、女王のやうに美しからう。おれは二通りの

紫水晶をもつてゐる。黒い方は葡萄酒のやうだし、赤い方は水を割つた葡萄
 酒のやうだ。おれは、虎の眼のやうな黄色いのやら、山鳩の眼のやうな赤い
 のやら、それから猫の眼のやうな緑のやら、いろんな黄玉をもつてゐる。お
 れは、しよつちう、氷のやうな焰で炎えて居る蛋白石をもつてゐる。影の恐
 ろしい、人の心を悲しうさせる蛋白石をもつてゐる。おれは死んだ女の眼の
 球のやうな、瑪瑙をもつてゐる。おれは、月が變れば色が變つて、日にあて
 ると色が褪める月長石をもつてゐる。卵子のやうな大きな、青い花のやうな
 青い青玉も、つてゐる。その玉の中には波が立つてゐて、その波の青い色は
 月に照らしても色の變るやうなことはない。おれは、貴橄欖石も、綠柱玉も
 綠玉髓も、紅寶玉も持つてゐる。赤瑪瑙も、風信子石も、白瑪瑙も、持つ
 てゐる。おれはみんなそれをそちにやつて、それからまた、他のものを添え
 てやる。印度の國王は、たつた今、鸚鵡の羽で、こさへた扇を四本贈つて呉

れた。それからヌミヂアの王は蛇鳥の羽の着物を贈つて呉れた。おれは、女
 の見ることをとめられてゐる、若い男は鞭で打たれてからでなければ見ては
 ならない水晶を一つ持つてゐる。おれは青貝の箱の中に、珍らしい土耳其玉
 を三つもつてゐる。それを額につけてゐると、ないものを想像することが出
 来る。手にもつてゐると、女を石女にすることが出来る。みんな金で買はれ
 ぬ寶ものだ。値ぶみの出来ない寶ものだ。けれども、これ丈けでみんなでは
 ない。黒檀の箱の中には、金の林檎のやうな、琥珀のコップが二つある。此
 コップの中へ敵が毒を盛りでもすると、それが銀の林檎のやうになるのだ。
 琥珀張の箱の中には、硝子張りの沓が入れてある。セレスの國からとりよせ
 たマントもあるユウフラテスの市からとつた夜光珠や、深緑玉で飾つた腕環
 もある。……これより以上に何が欲しいか？ サロメ。そちの欲しいものを
 いつて見い、おれは、それをそちにやる。たつた一つさへどければ、そちが

呉れといふものは何でもやる。たつた一つの生命さへどけたら、おれのもの
 なら、何でも呉れてやる。司祭の僧のマントでもやる。祭壇の帳でもそちに
 やる。」

猶太人等は之をきくなり驚いて、「オオヤ！ オオヤ！」といふ。

けれどもそんなものがサロメにとつて今更何にならう。彼女は今一度くり
 かへした。「ヨカナアンの首を下さいまし。」

ヘロッド王は遂に屈服してしまつた、そして背を椅子に倚せかけていふ。

「あれが欲しいといふものを呉てやれい！ 本當にあの子は母親の子だ！」
 やがて第一の兵士が王妃の側に近づくと、ヘロヂアス妃は國王の手から死
 の指環をぬいて、兵士に渡す。と兵士はすぐにそれを首斬り役に渡すのであ
 るが、さすがの首斬役もびつくりして暫くは茫然としてゐる。王は又叫ぶの
 である。

「誰がおれの指環をとつたのだ？ おれの右手には指環があつた。誰がおれの酒を飲んだのだ？ おれのコップには酒があつた。酒が一杯あつた。だれが飲んだのだな！ おゝ！ 確かにになにかの禍が、誰かの身に落ちかゝるのだらう。」

首斬役は此時黙つて水溜の中へ下りて行くのである。

王はやがて又曰ふ。「おゝ、何のために、おれは誓をしたのだろ？ 國王といふものは決して誓言などをするものではない。これを守らなければ恐いしさらばといつて守れば、矢張恐ろしい。」

成程王の言にも一理がないではない。けれどもヘロヂアス妃は得意けにいふのである。「娘はよくでかしましたわ。」

ヘロッド王は悄然としていふ、「屹度何かの禍が起るだらう。」
サロメは此時水溜によりかゝりて耳をよせながら、

「ちつとも音がしない。何も聞えないわ。どうして、此人は聲をたてないのだろ？ マア！ あたしを殺さうとするものでもあつたら、聲を立てゝやるわ、争つてやるわ、まけてゐやしないわ。……おやりよ、おやりよ、ナアマンや、おやりよ、いゝかえ。……いや、何にも聞えない。ひつそりしてゐ、恐ろしくひつそりしてゐるわ。アア！ 何だか落つこちた。何だか落つこちた音がしたわ。首斬りの劍だわ。あの奴隷、恐がつてるのだ。自分の劍をおつことしたのだ。思ひきつて殺せないのだわ。此奴隷、臆病ものだわ！ 兵卒をやつて見よう。」といつて、ヘロヂアスの扈従を見て呼びかけながら、「サアこゝへおいで、お前はさつき死んだ人の友達だつたのね、さうじやなくつて？ サア、いゝかえ、まだ死に人が足りないのだよ。兵卒達のところへ行つてね、下りて、あたしにもつて来るように云つてお呉れ、あたしの貰ふものを、陛下があたしに下すつたものを、あたしの物をね。」

「此處へおいで、兵卒たち。お前達此水溜へ下りて行つてね、あの人の首をもつて来てお呉れ。」といふのであるが、兵卒も亦じりく〜とあとじさりするのである。とサロメは、

「陛下、陛下、あなたの兵卒に云ひつけて、ヨカナアンの首をもてこさせて下さいましな。」

丁度此時首斬役の大いなる黒き腕が、ヨカナアンの首を銀の楯にのせて、水溜から出て来る。それを見るとサロメは喜んで攫み取るのである。とヘロツド王は上着で顔をかくするのであるが、ヘロヂアス妃は笑つて、扇をつかつて居る。ナザレ人等は直ちに跪まづいて祈り始めるのである。ヨカナアンの首を得てサロメは宛がら鼠を得た小猫のやうにそれを弄びながら、

「お前は、この口にキスさせなかつたのね、ヨカナアンや。サア！あたし今

キスしてやるわ。熱した果物を噛むやうに、あたしの齒で食いついてやるわ。さうだ、あたし、お前の口にキスするのよ。ヨカナアンや。あたし前にさういつたのだよ、言やしなかつたの？ いつたのだよ。おー！あたし今キスしてやるよ。……でも、どうしてお前は、あたしを見なかつたのね、ヨカナアンや？ お前の眼は随分恐かつたよ、随分怒つて、輕蔑して居たのね、その眼が今瞑つてるのね。どうして瞑つてるの？ 眼をおあけよ。 瞼をお上よ、ヨカナアンや！ どうして、お前もうあたしを見ないの？ お前恐いのヨカナアンや、それであたしを見ないの？……それから、毒を出す赤い蛇のやうだつた。お前の舌ね、その舌も、もう動かないのね。もう今は何もいはないのね、ヨカナアンや、あたしに毒を吐きかけたあの眞赤な毒蛇も、もう何にもいはないのね。可笑しいわねえ、さうじやないの？ あの赤い毒蛇がもう動かないつて、マアどうしたのね？……お前はあたしの、何でも嫌つた

のね、ヨカナアンや。あたしを刎ねつけたのね。お前はあたしに悪口をついたのね。お前はあたしを賣女のやうに、淫奔者のやうにあつかつたのね。あたしを、このサロメを、ヘロヂアスの娘を、ユデアの王女をね！ マア、ヨカナアンや、あたしはまだ生きてるのよ、でもお前は、お前は死んでるのよ、そしてお前の首はあたしのものだよ。あたし今何でも思ふ通りに出来るのよ。あたしは今、お前の首を犬に投げてやることも出来れば、空をとぶ鳥に放つてやることも出来るのよ。犬が放つてにけたら、空の鳥か来てたべるだらうわ。……ねえ、ヨカナアンや、ヨカナアンや、お前は、あたしが愛しいと思つた、たつた一人の男だつたのよ。他の男はあたし、みんなきらひなのだよ。マア、お前は、お前は美しかつたわねえ！ お前の體は、銀の臺の上につけた象牙の柱のやうだつたわ。鳩がどつさり居て、白百合の一杯さいた花園だつたわ。象牙の楯でかざつた銀の塔だつたわ。お前の體のやうな白いもの

は、世の中に何もなかつたわ。お前の髪の毛のやうな黒いものは、世の中に何にもなかつたわ。世界中にも、お前の口のやうな赤いものは何もなかつたわ。お前の聲は、不思議な香りをたてる香爐だつたわ、そしてお前を見るとあたしには不思議な音楽が聞えたのだよ。マア、どうしてお前はあたしを見なかつたのねえ、ヨカナアンや？ 自分の手と悪口との後ろに、お前は顔を隠したのね。自分の神を見たがつてるもの、布をとつて、お前は自分の眼をかくしたのね。マア、お前は自分の神を見たけど、ヨカナアンや、それでもあたしを、あたしを、どうしても見なかつたのね。もしお前があたしを見たら、あたしを愛したやうにね。あたしは、あたしはお前を見たのよ。ヨカナアンや、そしてお前を愛しいと思つたのよ。お、どんなにあたしはお前を愛しいと思つたことだらう！ あたしはまだ、お前を愛しいと思つてるのよ、ヨカナアンや、あたしは、お前ばかりを愛しいと思つてるのだよ。……

あたしはお前の美しさに焦れてるのだよ。あたしはお前の體にかつてゐるのだよ。酒だつて、果物だつて、あたしの渴きと饑とを、いやすことは出来ないのだよ。あたしは、まあ、どうしたらいいのだらうねえ、ヨカナアンや！ 洪水だつて、海の水だつて、あたしの胸の火を消すことは出来ないんだわ。あたしは王女だつたのよ。それでゐて、お前はあたしを輕蔑したのね。あたしは處女だつたのよ。それなのに、お前はその貞潔をあたしからとつてしまつたのだよ。あたしは潔白だつたのよ。それなのに、お前は、あたしの血管に火をつぎこんだのだわ。……えゝ！ えゝ！ どうしてお前はあたしを見てくれなかつたのねえ、ヨカナアンや？ 若しあたしを見てくれたら、お前あたしを愛してくれたらうにねえ。屹度お前あたしを愛してくれたらうし、それに戀の秘密の方が、死の秘密よりか、ずっと大きいといふことは、あたしよく知つてるのだよ。人間の考へるべきことつたら、戀より外には何にも

ないんだもの。』ヘロッド王は今はいつと惡みのみである。『あれは化物だ、お前の娘は全く化物だ。本當にあれのしたことは大きな罪惡だ。わからない神に對して、屹度罪惡だ。』

と殘忍なるヘロヂアスは云ふ。『わたしは、娘のいたしたことを、満足に思ひますわ。だから、わたしはもう此處に居りますわ。』

さすがにヘロッド王もたまらなくなつて、さて立上つて、

『はあ！ それが同族相婚の妻の詞だな！ 行かう！ おれは此處にゐたくない。こりや、行かう！ 屹度、何か恐いことが起つて來るだらう。マナツセエ、イツサカアル、オジアス、炬火を消せ。おれは何物をも見たくない。何物にもおれを見させたくない。炬火を消せ！ 月を隠せ！ 星を隠せ！ 一處に奥へ隠れてしまはう、ヘロヂアス。おれは恐くなりだした。』
奴隸等は命によつて直ちに炬火を消す。星は姿をかくし、大きな黒雲は月

を蔽ひ、月全く隠れて、舞臺甚だしく暗くなる。國王はやをら階段を上りか
けるのである。暗闇の中にサロメの聲はきこえる。「おー！ あたしはお前の
口をキスしたよ、ヨカナアンや、あたしはお前の口をキスしたよ。お前の口
は苦かつたわ血の味だつたの？……いや、ひよつとすると血の味だわ。……
戀は苦いものだといふことだつたわ。……だつて、それがどうしたの？ そ
れがどうしたの？ あたしはお前の口をキスしたのだよ、ヨカナアンや。」
と月の光はサロメの上落ちて明るく王女の姿を照らすと思ふと、ヘロッ
ド王は振り向いて、サロメを見て叫ぶのである。「あの女を殺してしまへ！」
と兵士等は聲に應じて進み出で、楯をもつて、ユデアの王女、ヘロヂアス
の娘、サロメを壓殺したのである。

サロメ 終

昭和四年十月二日印刷
昭和四年十月五日發行

定價 參拾錢



世界文藝社
—(2)—
サロメ

編輯者 文藝社編輯部
發行所 東京市牛込區新小川町二丁目四番地
小林善八
印刷者 東京市神田區神樂町二十番地
關根正惠

(東京市神田區神樂町二十番地)

發行所 東京市牛込區新小川町二丁目四番地
(振替東京二一〇二番) 文藝社

小林篤里著

國民叢書

振かな付
各冊讀切
四六判美裝
各冊百餘頁
定價四拾錢
送料四錢

着實なる思想——豊富なる知識——秀でたる常識——これらは國民の等しく要求するところである。本叢書は此の要求の聲に鑑み、献身的の努力を以て國民全般に奉仕せんとするもので、其の説くところ、其の論ずるところは簡易にして、而も健全なる國民必樞の知識を注入せんとして、廣く百科の問題を網羅したる大寶典である。本叢書のいづれの一冊を選び、悉く之れ知識の源泉である。「萬有文庫」は趣味と實益とを以て進み、「國民叢書」は學藝、修養を主として、眞面目に進まんとするのである。滿天下の諸賢は宜しく圖書の選擇に留意せられ、處世の安定と、家庭の圓滿を圖る爲め本叢書の購讀に躊躇なからんことを切望するのである。

國民叢書の名聲は社會周知のこと

發賣部數實に二百萬冊を突破す

文部省認定 茗溪會推薦 文献賞受領の良書！

◇既刊書目次の如し

國民叢書既刊目錄 (各冊十四錢)	
(1) 新しき修養	(15) 論理學早わかり
(2) 宗教早わかり	(16) 野球の話
(3) 立志より成功への近道	(17) 斯の如き人は成功する
(4) 國民としての常識	(18) 心理學の話
(5) 新聞を読む基礎の知識	(19) 婦人の進むべき道
(6) 經濟學の知識	(20) 理想の家庭
(7) 日常科學の話	(21) 教育學の話
(8) 偉人の修養	(22) 倫理學の話
(9) 哲學早わかり	(23) 平凡道徳
(10) 新しき年中行事	(24) 精神修養
(11) 藝術の話	(25) 向上發展の基礎
(12) 思想善導	(26) 佛陀の福音
(13) 文化生活の基調	(27) 基督の福音
(14) 青年の進むべき道	(28) 無線電話早わかり

東京市牛込區文藝社 電話一〇二〇番

東京市牛込區文藝社 電話一〇二〇番

(錢十四冊各) 録目刊既書叢民國

(29)	無線電話の知識	(43)	科學萬能の世界
(30)	世界の格言と警句	(44)	宇宙の秘密
(31)	家庭科學の話	(45)	陸軍の知識
(32)	普通選舉の話	(46)	日本歴史の知識
(33)	政黨早わかり	(47)	東洋歴史の知識
(34)	貯金のすゝめ	(48)	西洋歴史の知識
(35)	音樂の知識	(49)	日本歴史年表
(36)	公民としての心得	(50)	明治大正の事蹟
(37)	成人教育の話	(51)	今日の歴史
(38)	農村發展の基礎	(52)	文學概論
(39)	日本地理の話	(53)	國文學史
(40)	全國名所めぐり	(54)	商事要項
(41)	萬有科學の知識	(55)	實修商業簿記
(42)	自然科學の進化	(56)	メートル法の知識

◇ 東京市牛込區 文藝社 振替口座 東京 二〇一〇番

(錢十四冊各) 録目刊既書叢民國

(57)	憲法早わかり	(63)	國語學の知識
(58)	法律の知識	(64)	現代文學の輪廓
(59)	陪審法早わかり	(65)	教育勅語謹解
(60)	佛敎入門	(66)	社會問題早わかり
(61)	國文法の知識	(67)	金解禁早わかり
(62)	修辭學の要領	(68)	美術の知識

新時代に生きるの誇りは「國民叢書」の愛讀者たることによつて得られる。

本叢書は豫約出版の様に窮屈なものにあらず。何人にも開放せられたる民衆大學講座である。読み度いと思ふ本を選んで、一冊でも二冊でも自由に読み得る寶庫である。而も難解なる性質のものに對しても、一讀了解の出来るように、説述せられたのが本叢書の特徴である。(自由選擇—幾冊にても分賣す)

◇ 東京市牛込區 文藝社 振替口座 東京 二〇一〇番

空前の大文庫——未曾有の廉價圖書の出現

萬有文庫

ポケット列 各冊讀切 定價十五錢 送料二錢 選擇自由

讀書の習慣は現代人修養の基礎である、然も世に良書は甚だ多いが其れ等に親しむ機會は餘りに乏しい。茲に、我「萬有文庫」は總てが書おろしで、一切の學術に關する良き内容を平易に説く一方に、現代人必讀の文學、藝術は勿論、娛樂スポーツ、趣味一般に亘り、宇宙萬有と人生百般に關する知識と情操と、並びに若々しきセンチションを包含する活きた學問の泉であり、百般の興味と感激の庫であることを期する。萬有文庫、同時に萬人文庫であるべく至廉の定價と、清亨な外装をもつて讀書家の自由選擇に任すのである。空前の計畫、未曾有の便益書！

◇既刊書目次の如し

萬有文庫既刊目錄 (各冊五十錢)	
(1) カント哲學物語	(15) ユーモア傑作集
(2) 戀愛の進化	(16) 日本神話
(3) マルクス資本論物語	(17) 希臘羅馬神話
(4) 聖書の要領	(18) 接吻の歴史と技巧 (發賣禁止)
(5) 西洋傑作小話	(19) 美人になる秘訣
(6) 現代歐洲哲學物語	(20) 性の常識
(7) 性とエデンの園	(21) 結婚の歴史
(8) 心の不思議	(22) 戀愛物語
(9) 産兒制限の考察	(23) 新しい映畫の見方
(10) 西洋獨占ひ	(24) モダン・ガール物語
(11) 雄辯術	(25) 幽霊物語
(12) 株式取引の話	(26) 星のロマンス
(13) 議會解散と普選	(27) 理想郷物語
(14) 笑の心理學	◇以下續々刊行

◇ 東京市牛込區 文藝社 振替口座 東京 二〇一一番

◇ 東京市牛込區 文藝社 振替口座 東京 二〇一一番

小林篤里著 新記述法による日本歴史

日本國民史

四六判、美表装
名冊百餘頁
定價六拾錢
送料各六錢

◇興味中心・通俗本位の日本國民の歴史！

歴史は即ち一國の履歷書である。日本歴史は之れ我帝國、我國民の履歷書である。苟も我帝國々民として我國の歴史に暗いのは、則ち自分の履歷を知らぬに等しく、まことに恥しいことである。殊に我帝國には世界に秀絶したる精神がある。我憲法も此の間に起原し、我國民道徳も此の中から胚胎して居るのである。この國體、此の精神も亦我國史を外にして説明は加へられぬ。

本書は天孫降臨に始め、現今聖代までの要項的史實、および忠臣、義士、孝子、賢婦等、有ゆる方面に亘つて系統的に叙述したるもの、即ち建國三千年の歴史を極めて通俗的に筆を進め、史實趣味を普及せしめんとする主旨のもとに刊行したものである。

東京市牛込區 文藝社 總發行所
東京市牛込區 文藝社 發行所
東京市牛込區 文藝社 發行所

日本國民史既刊目錄 (各冊十六錢)

第一卷	建國より平安朝へ
第二卷	源家と平家
第三卷	鎌倉幕府時代
第四卷	吉野を護る人々
第五卷	建武の中興
第六卷	勤王の輩出
第七卷	足利幕府の建設
第八卷	應仁の亂前後

東京市牛込區 文藝社 發行所
東京市牛込區 文藝社 發行所
東京市牛込區 文藝社 發行所

小林鶯里著 = かく述べれば歴史は無味乾燥にあらず

興亡五千年史

四六判・美装・洋綴
各冊百餘頁
定價各六拾錢
送料各六錢

見よ!!
歴史の民衆化——通俗的記述——
歴史の讀物化——興味中心の記述——

今日見る幾多の歴史は、餘り程度の高きために一般の人々に適せず、或は事實の簡に過ぎたるため了解に苦む場合が多い。著者はこの點を考慮して、傳説時代の世界から筆を起し、努めて平易に五千年に亘る國家の興亡と、それに聯關せる偉人豪傑の事蹟を述べ、吾が同胞に向つて世界人類の残したる業蹟を知らせようとしたものである。ともすれば無味乾燥に流れようとする歴史の弊を補はんがため、極めて通俗的に而も詳細に且つ興味を中心述べし所は著者の新しい試みとして讀者に批判を仰がんとする所である。

興亡五千年史既刊目錄(各冊十六錢)

第一卷	傳	說	の	世	界
第二卷	文	明	の	誕	生
第三卷	ア	テ	ネ・ス	バル	タ
第四卷	ギ	リ	シ	ヤ	の
第五卷	キ	リ	ス	ト	の
第六卷	フ	ラ	ン	ス	の
第七卷	ア	ラ	ビ	ヤ	の
第八卷	土	耳	古	の	盛
第九卷	宗	教	改	革	時
第十卷	ル	イ	全	盛	期
第十一卷	亞	米	利	加	發
第十二卷	英	吉	利	の	建
第十三卷	英	國	の	議	院

東京市牛込區 文藝社 電話二〇一一番 東京市牛込區 文藝社 電話二〇一一番

東京市牛込區 文藝社 電話二〇一一番 東京市牛込區 文藝社 電話二〇一一番

(錢十六冊各) 書叢文作社藝文

著里爲林小

- (1) 新選書簡文
- (2) 口語體書簡文
- (3) 美文精選
- (4) 文章組立法
- (5) 叙事文と叙景文
- (6) 新しき記事文
- (7) 新しき紀行文
- (8) 新しき日記文
- (9) 新時代の論文
- (10) 小品文精選
- (11) 新選祝賀弔祭文
- (12) 名家文選

◎ 作文の絶好参考書として定評あり

時代の推移はあらゆる方面に舊きを捨て、新しきに就く傾向を有してゐる。新しき時代には新しき時代の文學がある。著者はこの點について大いに鑑みることがあり、新時代に最も適合する作文書の體系を編むことに多年心を注いで来た。かうして編まれたものが「文藝社作文叢書」である。作文に關するあらゆる方面の知識は本叢書によつて充分に得られることを確信する。殊に本叢書の誇りとする所は、定價の至廉なる點で、これは夙に文章報國をモットーとしてゐる我が社の一事業として一般諸賢の批判を仰がうとする所である。

◎ 學生諸君一般讀書家より白熱的歡迎

錢六料送 錢十六價定 冊各 頁十六百各裝美判六四

◇ 東京市牛込區 文藝社 電話二〇一一番 ◇

書圖評好社藝文

◎ 小林爲里著 諷刺と寓意の社會相	◎ 小林爲里著 俳趣情景	◎ 小林爲里著 文章三百六十五日	◎ 小林爲里著 文章春秋	◎ 小林爲里著 文章報國	◎ 小林爲里著 警鐘の亂打	◎ 小林爲里著 爲里隨筆
一、二〇〇、〇八	一、二〇〇、〇八	一、二〇〇、〇八	一、二〇〇、二〇	一、二〇〇、〇八	一、五〇〇、二〇	定價一、五〇〇、送、一〇

◇ 東京市牛込區 文藝社 電話二〇一一番 ◇

書圖評好社藝文

◎小林篤里著	短歌は如何して作るか	定價 一、二〇	透、〇八
◎小林篤里著	新しい詩は如何して作るか	一、二〇	〇八
◎小林 操著	作文の考へ方と模範答案	一、二〇	〇八
◎小林綾子著	鈴蘭の歌へる	一、二〇	〇八
◎小林 操著	或る學生の手記	一、二〇	〇八
◎小林綾子 操共著	運命に従ふ者	一、五〇	〇八
◎小林綾子 操共著	若人の胸へ	一、五〇	〇八
◎大鹿 卓著	詩集 兵隊	一、五〇	〇二

◇ 東京市牛込區 文藝社 振替口座東京 番二〇一〇二 ◇

語物傳史の意得者著

◎小林篤里著	釋迦の生涯と思想	定價 一、五〇	透、一〇
◎小林篤里著	基督の一生	一、二〇	〇八
◎小林篤里著	大楠公	一、三〇	〇八
◎小林篤里著	新田義貞	一、二〇	〇八
◎小林篤里著	豊巨秀吉	一、五〇	〇二
◎小林篤里著	眞田の智謀	一、三〇	〇二
◎小林篤里著	武田信玄	一、二〇	〇八
◎小林篤里著	曾我兄弟	一、二〇	〇八
◎小林篤里著	高山彦九郎	一、二〇	〇八
◎小林篤里著	赤穂義士(三冊)	各 一、三〇	一、〇
◎小林篤里著	日蓮の生涯	一、三〇	〇八

◇ 東京市牛込區 文藝社 振替口座東京 番二〇一〇二 ◇

世界文藝叢書

袖珍形美装
著者肖像入
各冊定價三十錢
送料六錢

極めて廣き範圍の讀書人を満足せしむべき圖書を提供するには種々困難なる條件に遭遇する。その主なるものを擧ぐれば、一、極めて廉價に提供し得る圖書。二、文藝趣味を有する人、また然らざる人にも歓迎さるゝ圖書。三、外國語の素養ある人、また之なき人にも讀まるゝ圖書。四、學生諸君又は一家・社會・國家の務めに多忙なる人に對し極めて僅かなる時間に於て趣味と實益を供給し得らるゝ圖書。五、永久に歓迎さるゝ圖書等。如上五項目は是非備へねばならぬ。本叢書發行の趣旨は、この五項目を基礎として、何人も知らねばならぬ世界の文藝上の名作を、廣く紹介せんとするにある。

◇既刊書目次の如し

世界文藝叢書目録 (各冊十三錢)

(1)	ハムレット	シエクスピヤ作
(2)	サロメ	ワイルド作
(3)	ファウスト	ゲーテ作
(4)	ヴェニス商人	シエクスピヤ作
(5)	夜の宿	ゴリキイ作
(6)	マダダ	ズウダアマン作
(7)	青い鳥	メーテルリンク作
(8)	思ひ出	フェルステス作
(9)	悪魔の子分	シヨウウ作
(10)	百人一首略解	藤原定家選
(11)	犬と熊	チエホフ作
(12)	武器と人	シヨウウ作
(13)	巴里	ソラ作
(14)	トリアングレー	オスカールワイルド作
(15)	日本永代藏	井原西鶴作
以下續刊		

◇ 東京市牛込区新小川二丁目四番地 文藝社 振替口座東京 二〇一〇番 ◇

◇ 東京市牛込区新小川二丁目四番地 文藝社 振替口座東京 二〇一〇番 ◇

—讀者の藝文の主とせよ—

雜誌

藝文

月刊

毎月一日發行——定價貳拾五錢——送料一錢

○文藝を手にせずして文藝を語る可らず

文藝趣味の諷刺!

隠れたる青年文士を世に紹介せんす。
諸君の作品に對しては絶対に尊重を與ふ。
誌上を開放し讀者にはあらゆる自由を與ふ。
定價の低廉なるは利益主義に非ざる事を證す。
趣旨に於て他の雜誌と異るところを誇りす。
讀者諸君自身の雜誌!

文壇への登龍門

創作。散文(抒情、叙事、叙景)感想。短文。
詩。短歌。俳句。川柳。讀者文藝。

每號懸賞募集(毎月十五日締切)

純粹文藝の宣揚!

○學生諸君及投稿家唯一の機關誌!

◇ 東京市牛込區 文藝社 振替口座東京 番二〇一一二 ◇

終

